

Fig. 67 S D 1305出土遺物実測図(8)

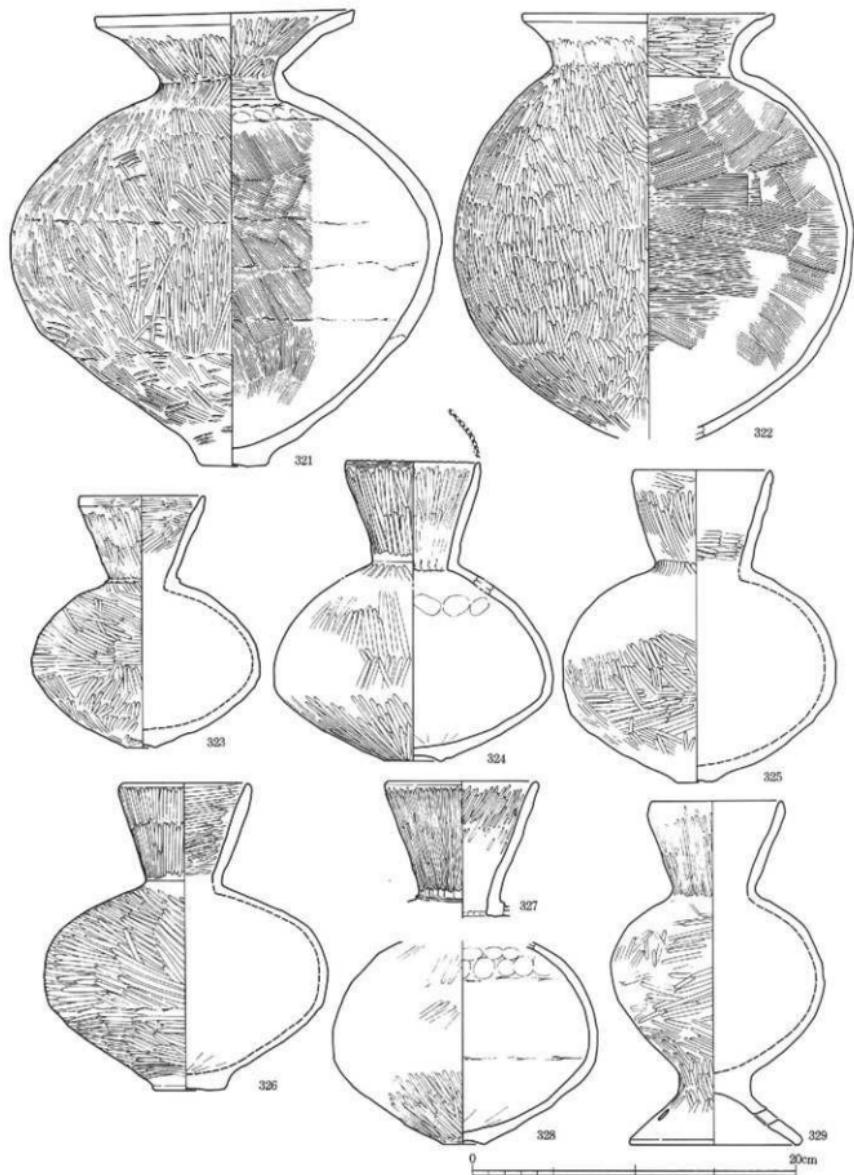


Fig. 68 SD1305出土遺物実測図(9)

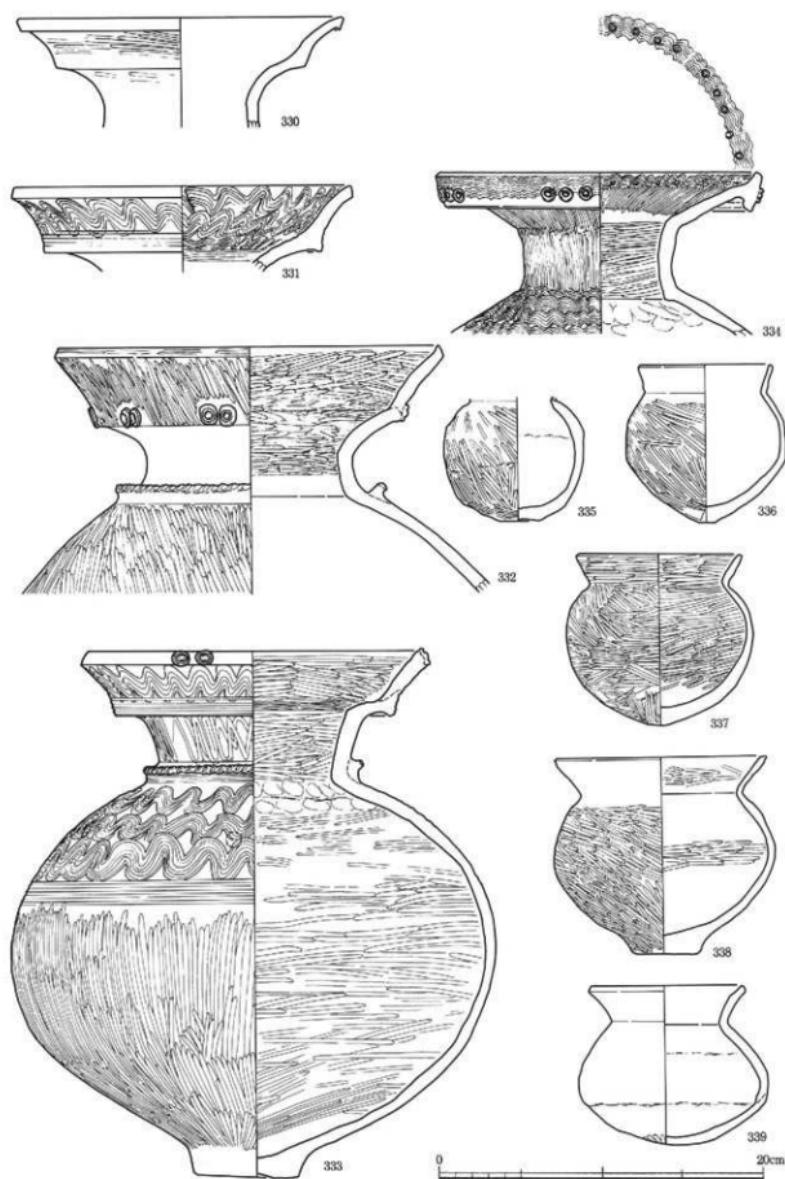


Fig. 69 S D 1305出土遺物実測図(10)

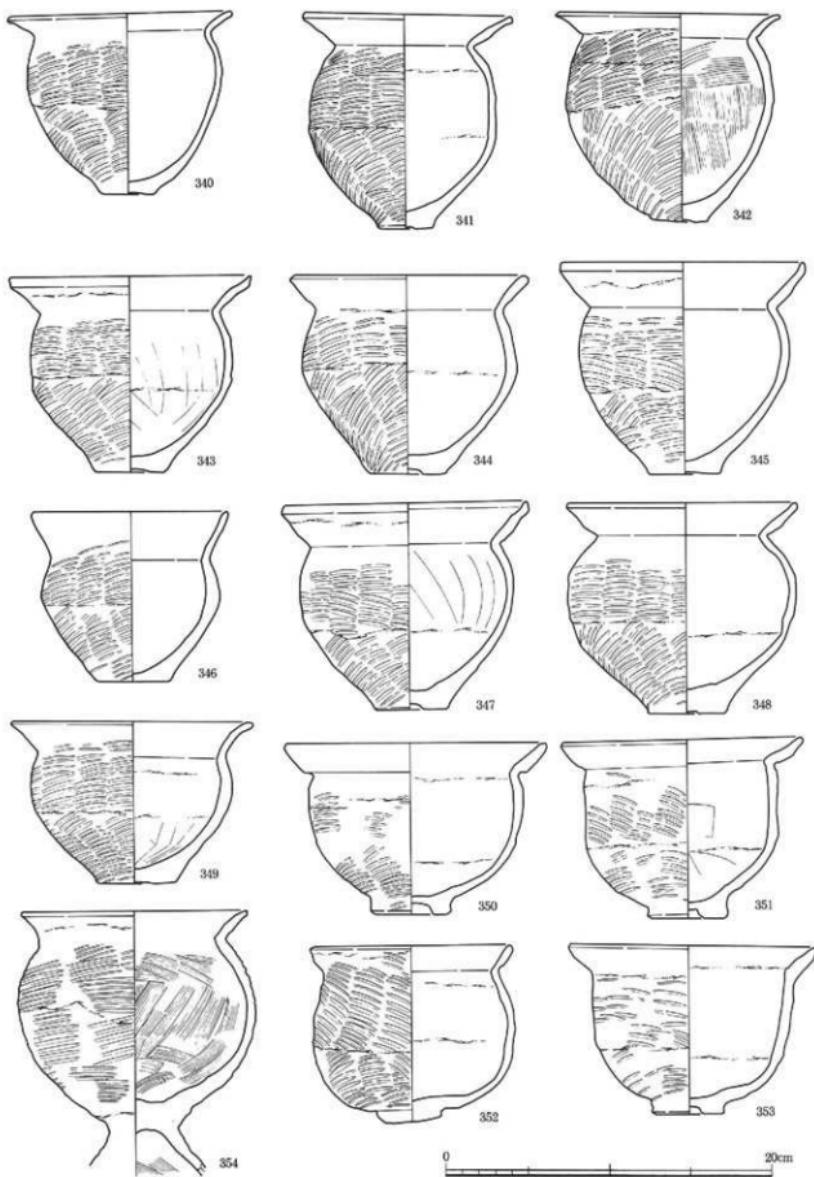


Fig. 70 SD1305出土遺物実測図(11)

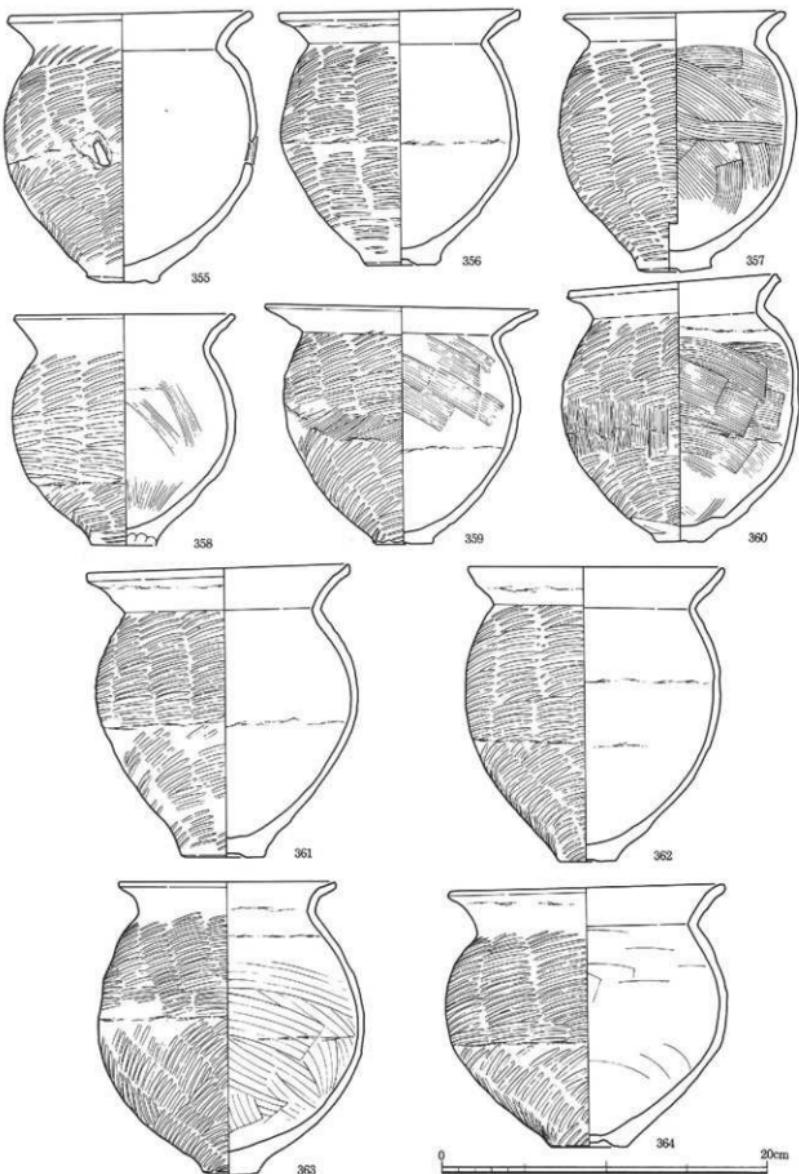


Fig. 71 SD 1305出土遺物実測図(12)

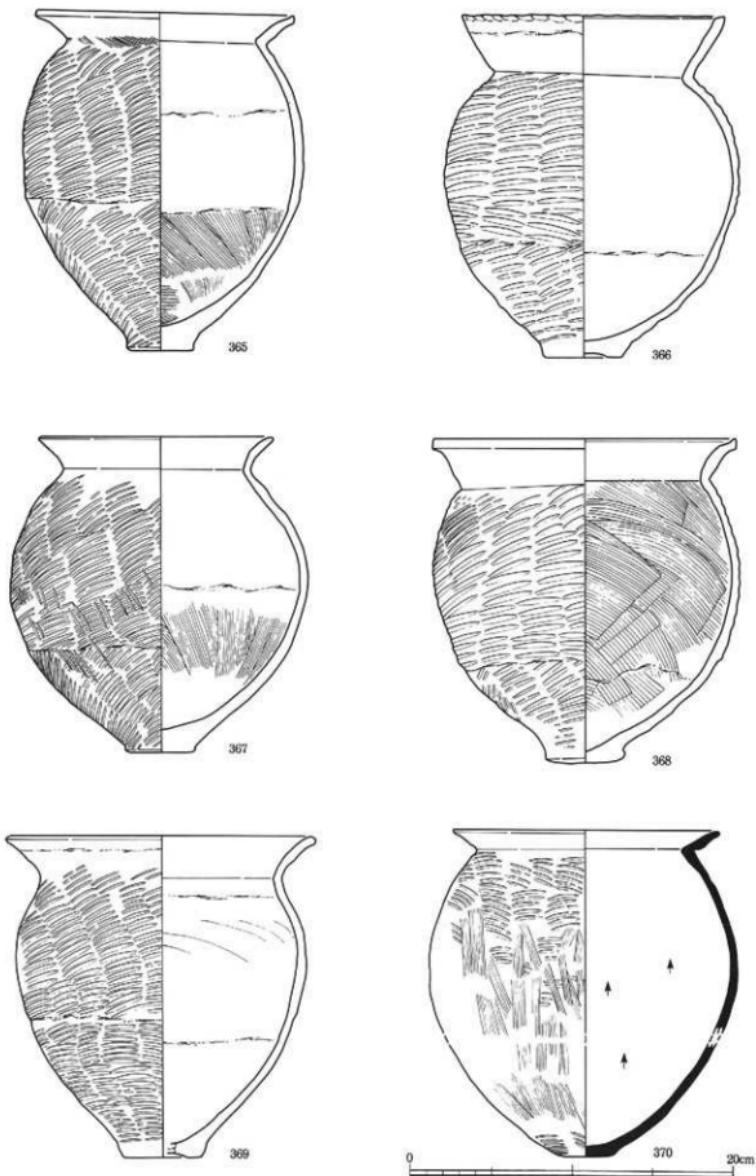


Fig. 72 S D 1305出土遺物実測図(13)

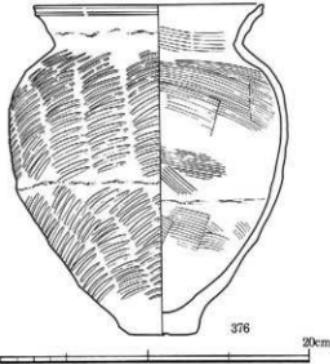
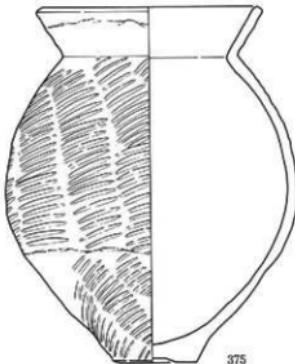
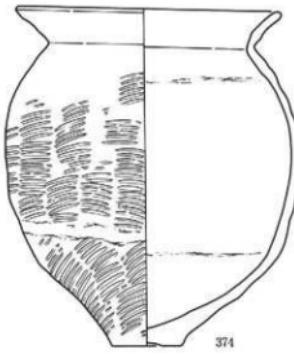
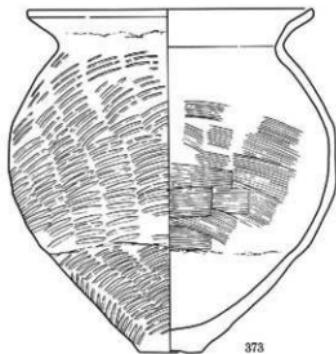
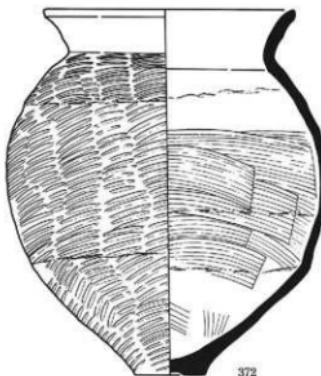
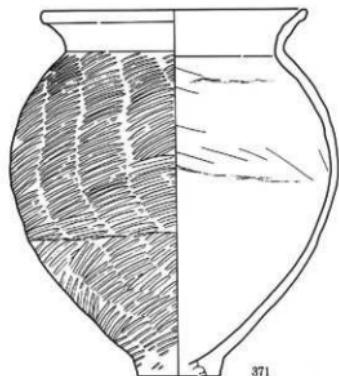


Fig. 73 S D 1305出土遺物実測図(14)

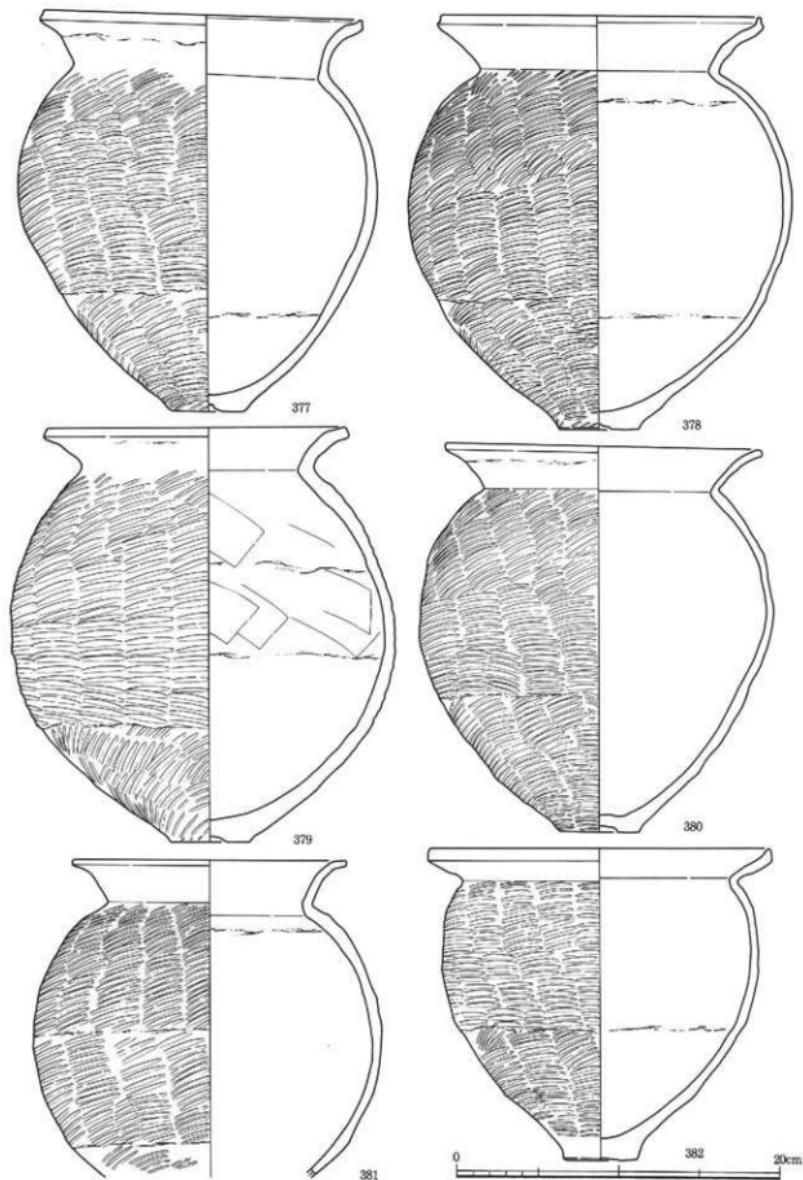


Fig. 74 SD 1305出土遺物実測図(15)

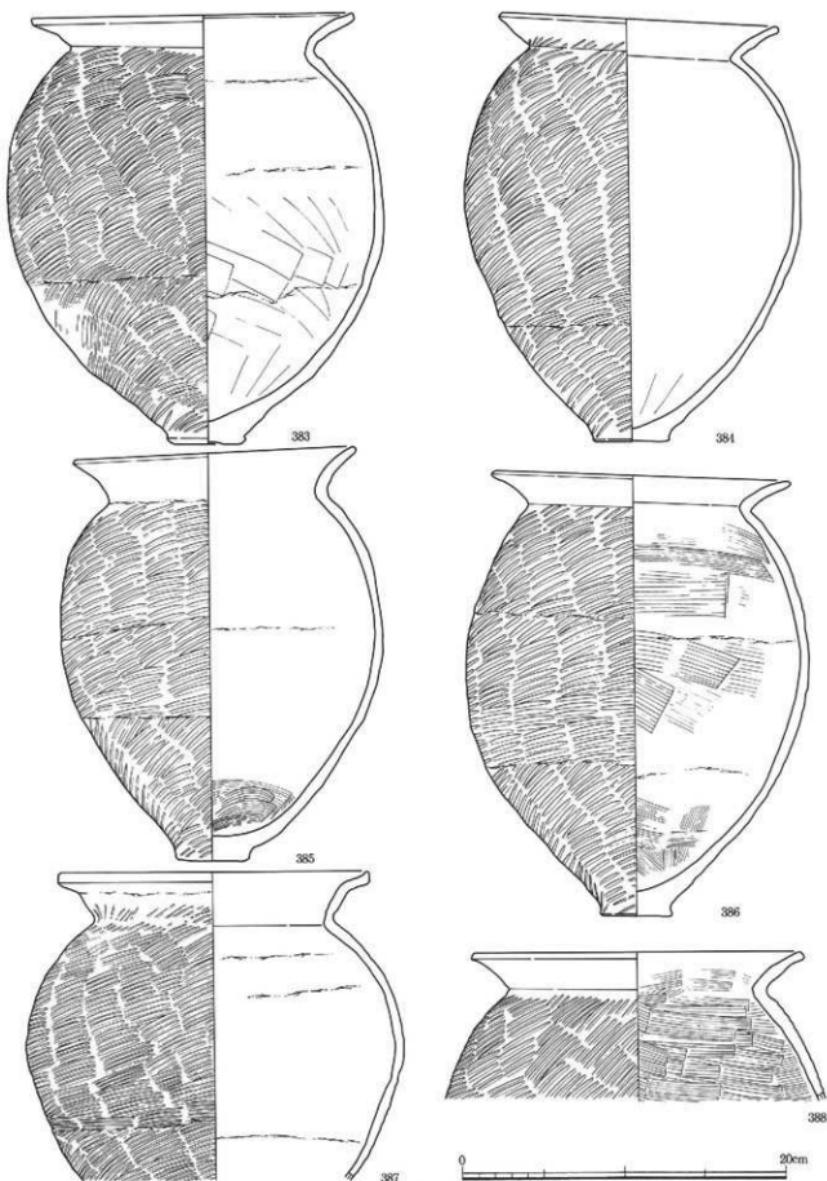
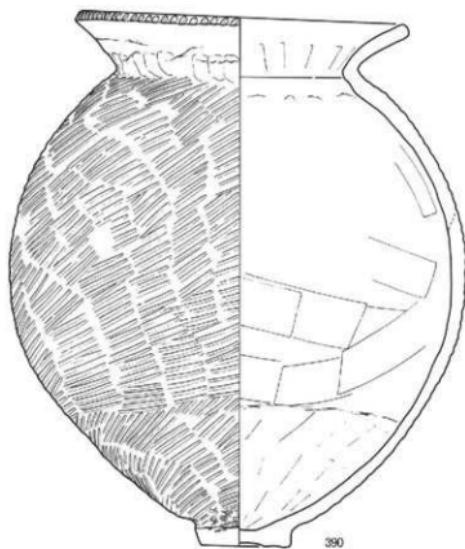
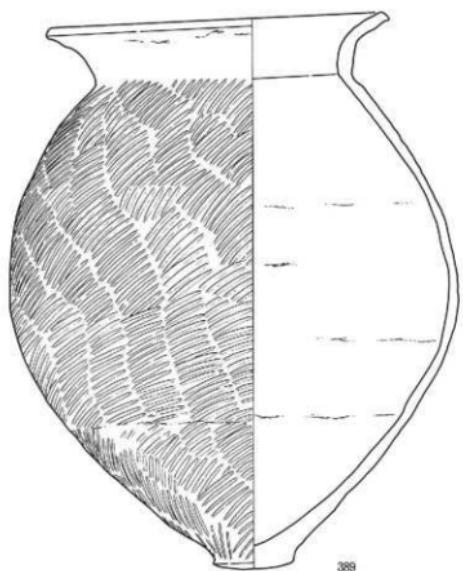


Fig. 75 S D 1305出土遺物実測図(16)



0 20cm

Fig. 76 SD 1305出土遺物実測図(17)



Fig. 77 S D 1305出土遺物実測図(18)

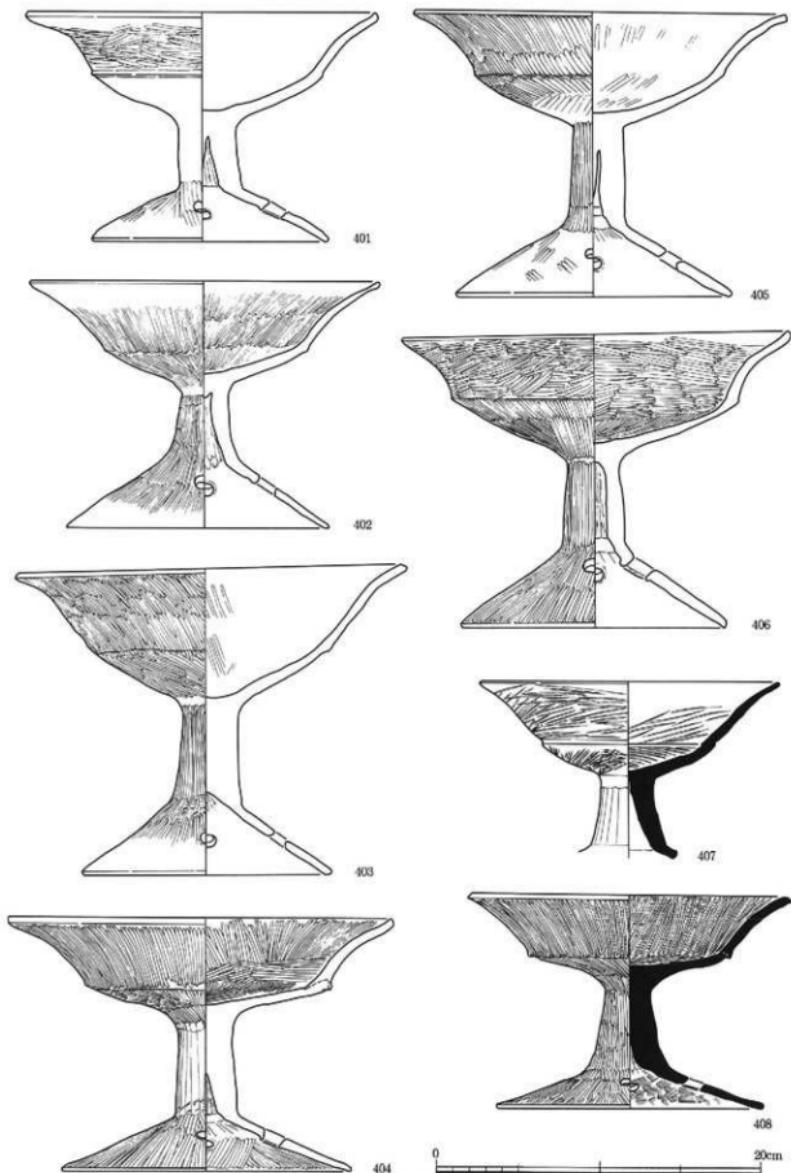


Fig. 78 S D 1305出土遺物実測図(19)

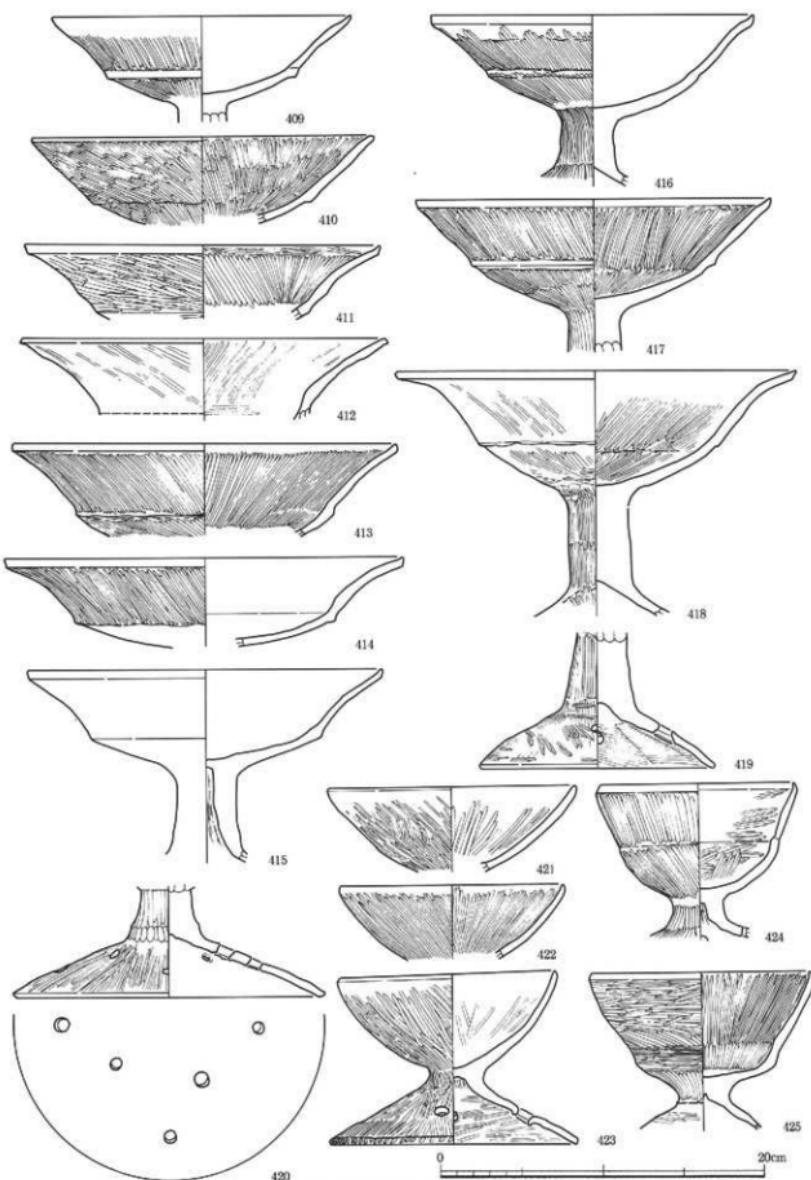


Fig. 79 SD 1305出土遺物実測図(20)

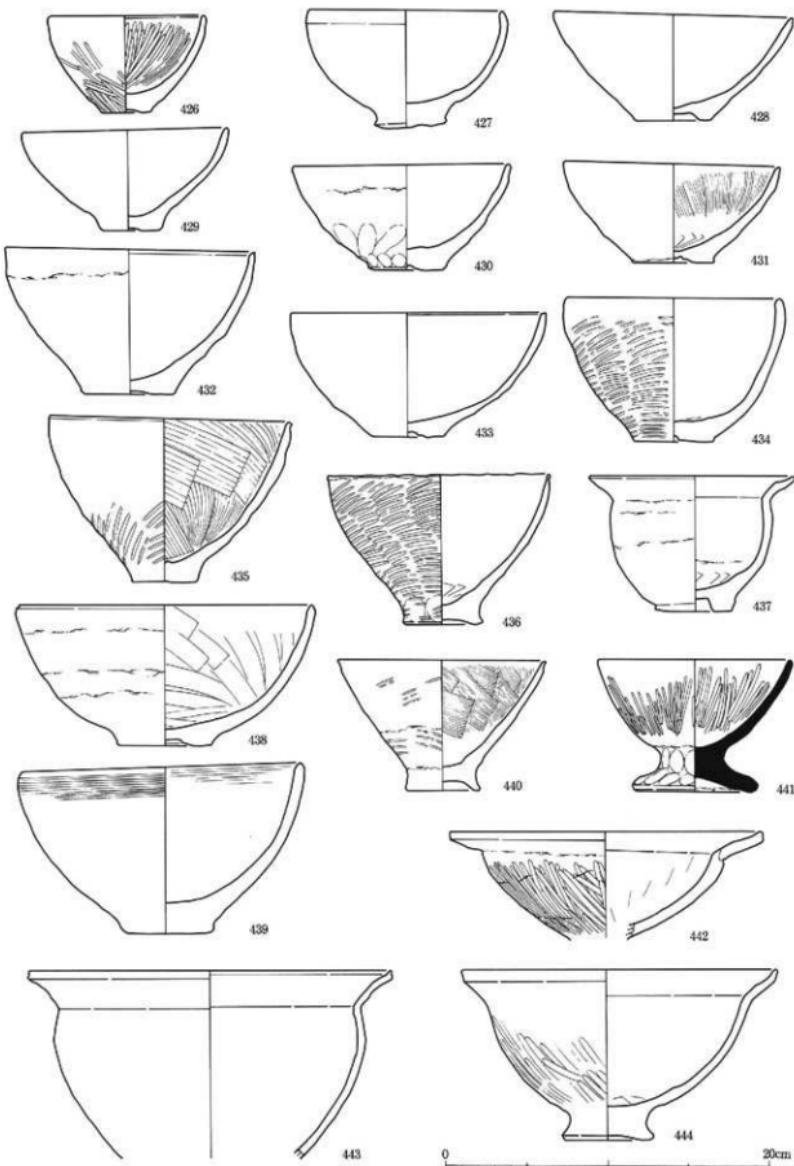


Fig. 80 SD 1305出土遺物実測図(21)

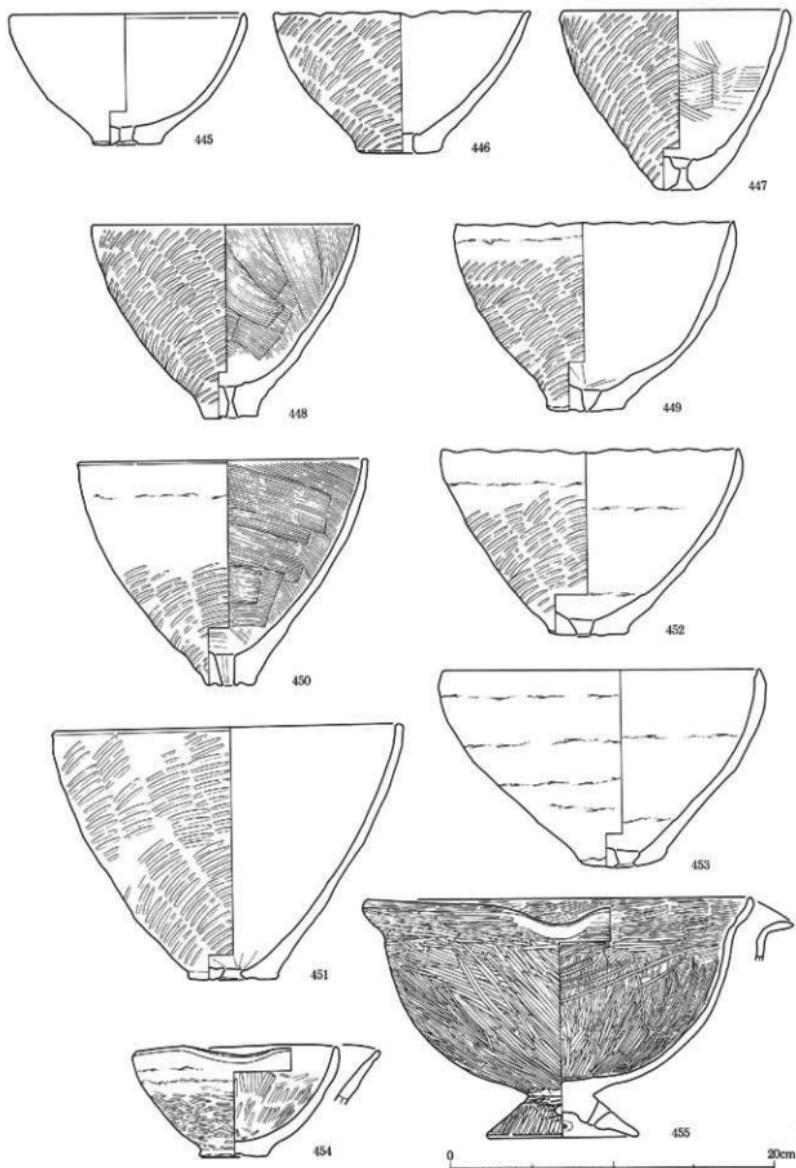


Fig. 81 SD 1305出土遺物実測図(22)

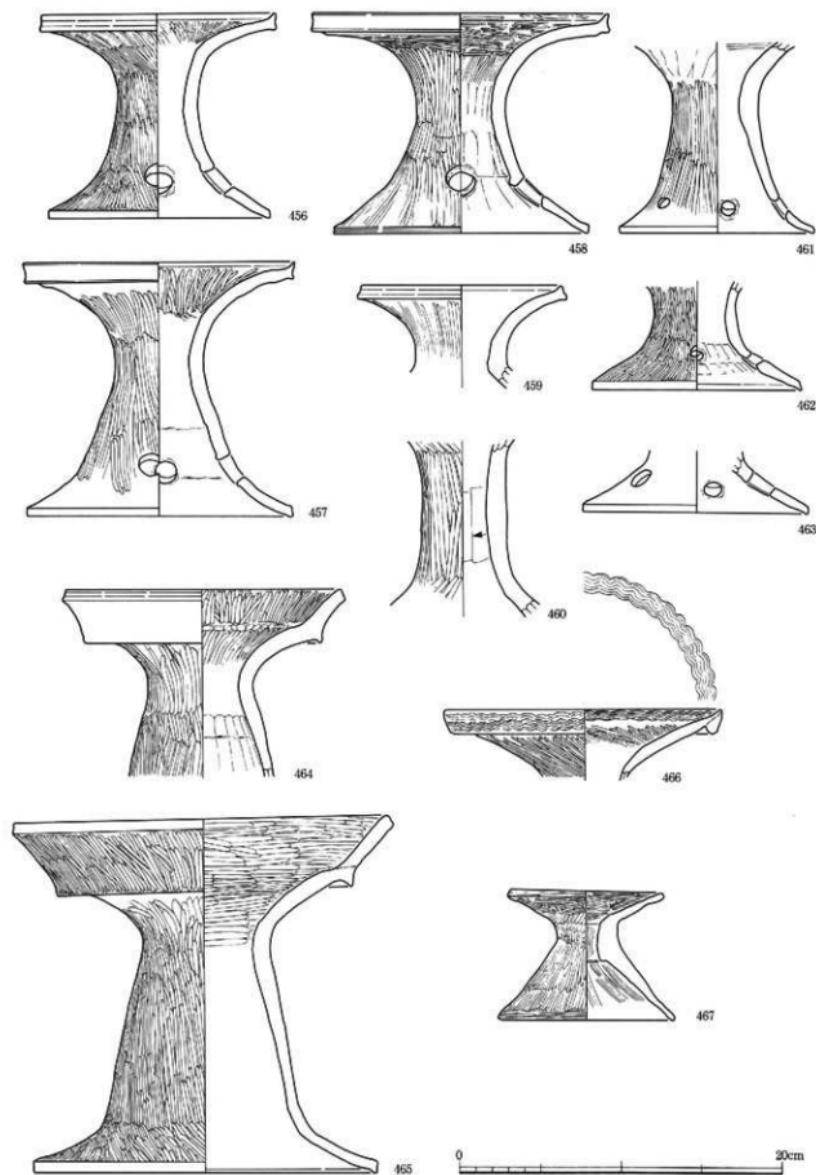


Fig. 82 SD 1305出土遺物実測図(23)

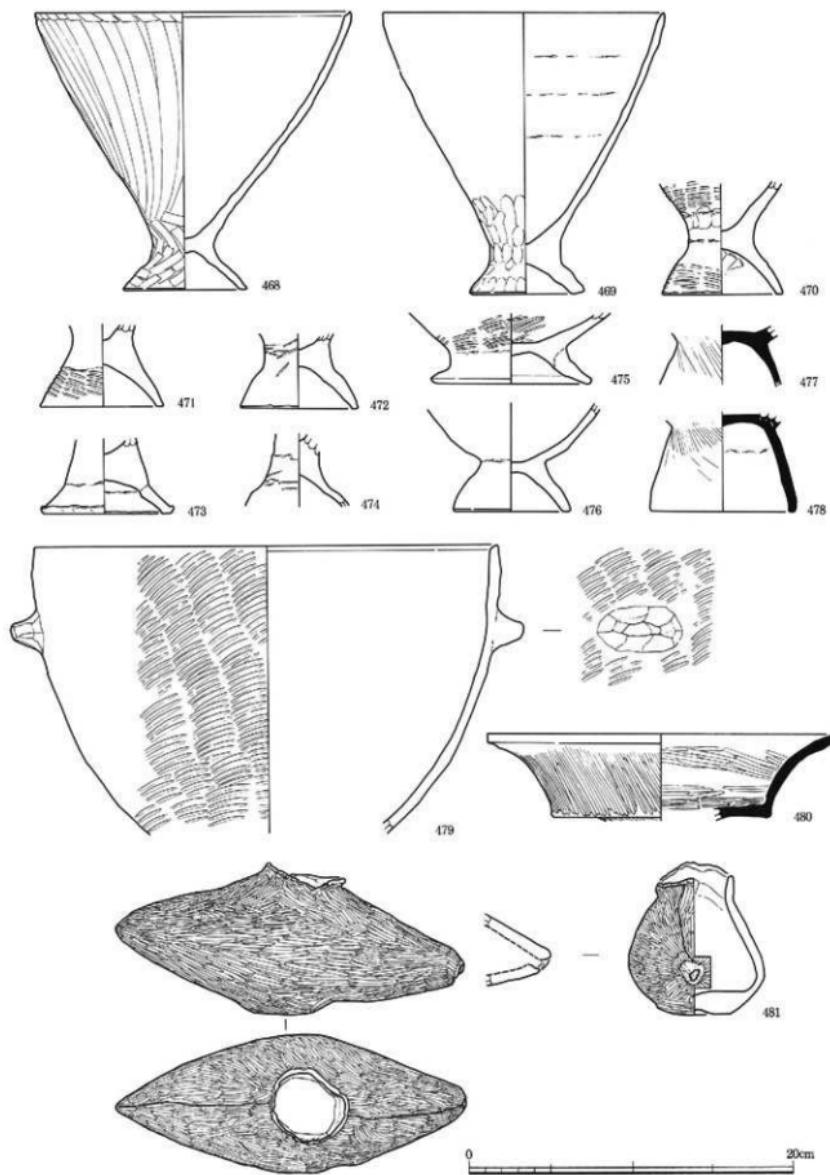


Fig. 83 SD 1305出土遺物実測図(24)

を備える。2点。419は高杯脚部で、中実の脚柱部に内湾した脚裾を備える。420は中実の短い脚柱部と、大きく広がりをみせる脚裾をもつ高杯脚部で、4方透孔を2段に設けている。

鉢は34点出土した。426～435・438・439のように底部A・B形態の小形鉢Aが主体である。15点。口縁の内湾が緩い428・429や、内湾が強く半球状を呈する438などが認められる。また相対的に小形の426～431、やや大きい432～435・438・439がある。調整はナデをはじめとした平滑技法を主としているが、他にタタキ痕をもつ434・435、ミガキAで仕上げた426がある。437は超小形の弥生形甕Aeよりさらに小さく、ナデ仕上げされた甕類似形態の小形鉢Dである。1点。436・440は口縁が直線的あるいは弱く内湾して開く底部C形態の小形鉢Bである。2点。442～444は半球状の体部に緩やかに屈曲した口縁を付加した小形鉢Cである。3点。441は生駒西麓産の胎土をもち、在地にみられない形態のため、外来系土器I類に含める。445～453は有孔鉢である。9点。半球状の体部をもつ有孔鉢A445・446・449・452・453、やや立ち上がりの強い体部をもつ有孔鉢B447・448・450・451がある。体部の調整は445・453がナデ、他の個体はタタキ成形痕を残す。454・455は片口をもつ鉢である。454は小形鉢Aを基本形とし、半球状の体部をもつ。1点。455は台付の中形鉢で、半球状の体部に内湾気味に広がる口縁を付加する。他に口縁部の破片が1点あり、計2点が出土している。内外面に密なミガキAを認める。

器台は大形器台11点と小形器台1点、合計12点が出土した。大形器台にはA・C・Dの3形態が認められる。大形器台Aは口縁を残す456～459の4点、461の体部1点、及び461～463の脚部3点がこれに含まれると思われる。合計8点を数える。456～458から共通する特徴を抽出すると、口縁部は大きく外反し、端部は上方に拡張されて幅の広い端面を作る。胴部から上方、口縁部寄りは大きく拡張されて外反するのに対し、脚部寄りの外反度は緩い。裾部付近に円孔を穿って透孔とする。466は大形器台Cである。口縁端部に粘土帯を付加して端面を作り、これを装飾帶として波状紋を巡らせていく。1点。464・465は大形器台Dで、口縁部が複合口縁となった異形の器台である。大きく開く口縁に対して、脚部はあまり広がりをみせず、また透孔をもたない。2点。467は小形器台Aで、1点が認められた。

468～474は製塩土器Bである。468・469は体部が内湾気味に広がり、上げ底の小さな脚台をもつ。いずれもナデで仕上げている。470は脚台、体部下半ともにタタキ痕を明瞭に残す。台付甕の可能性もある。471～474はタタキ、あるいはナデ仕上げの製塩土器脚台である。

475～480は器種不明の土器である。475・476は脚台。479は大形の鉢状を呈するタタキ成形の土器で、口縁部直下に把手を設ける。480は外来系土器I類の土器で、器台かも知れない。

481は注口土器で、筋錐形の体部の一方に穿孔を設け、円形の小さな口縁と低い底部形態Bをもつ。全面に緻密なミガキAが認められる。

#### 2-d. 1～3層遺物(Fig.84～86, PL.93・94)

3層以上から出土した遺物は量的にも多い。しかし取り上げ方法にも左右されるが、遺存状態が不良であったことなどから、土器窓などの土器集積を除けば層位ごとに分別した厳密な分層発掘が行えたとは言い難い状況であった。従って必然的に一括性への信頼度の低下した資料で、ある程度の時期幅を考慮する余地がある。しかし4層検出土器よりは明らかに後出のものを主体とする。

482～498は3層から出土した。壺(482～485)、甕(486～491)、高杯(492～494)、小形器台(495)、娘壺(496)、鉢(497・498)などの器種がある。

壺には広口壺482、受口状に口縁を拡張した壺X483、広口直口壺484のほか、東海系の瓢形壺485がある。485は口縁部直下、頸部直上、肩部にハケ原体類似工具木口を水平に押捺し装飾としている。甕は



Fig. 84 SD1305出土遺物実測図(25)

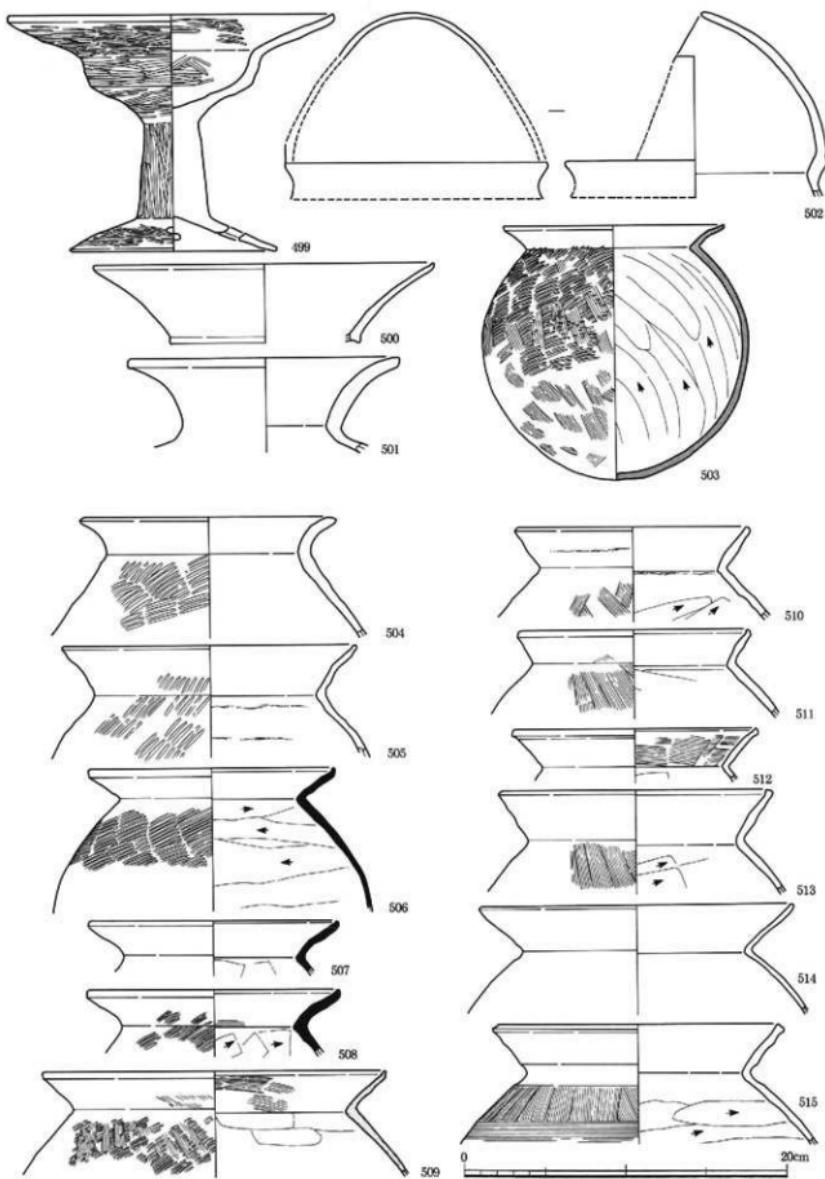


Fig. 85 SD 1305出土遺物実測図(26)

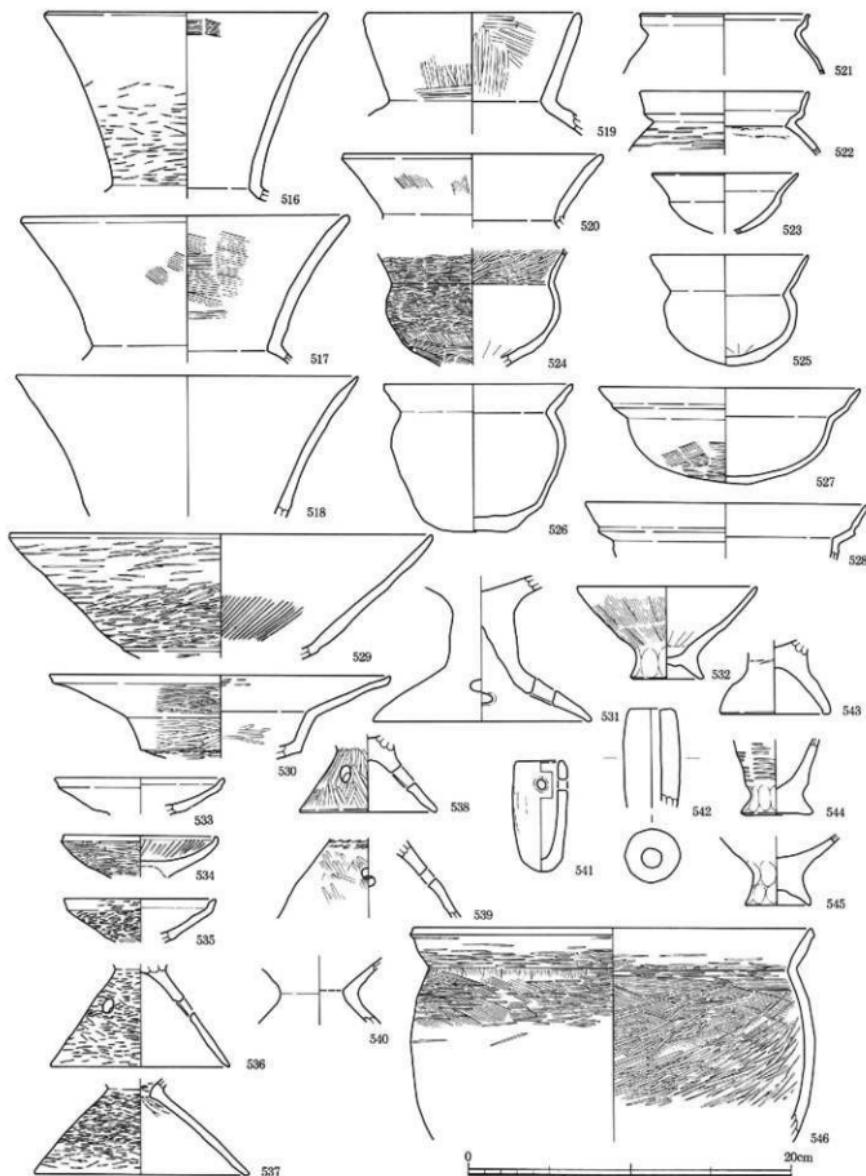


Fig. 86 S D 1305出土遺物実測図(27)

486～489が弥生形甕A、490が近江系の受口状口縁甕、491がハケを多用した甕Xである。490は体部を粗い斜方向ハケで調整し、肩部に3条の沈線を巡らせる。外来系土器I類。492・493は有稜高杯Aであるが、口縁の形態的特徴がそれぞれ異なる。椀形高杯Bの494は脚柱部が短い。495は小形器台B、496は砲弾状の蛸壺Cである。鉢には台付の小形鉢X497、有孔鉢498が認められる。

2層出土遺物として499～503を掲げる。高杯(499・500)、壺(501)、手焙(502)、甕(503)などがある。

499はミガキAを横方向に用いた有段高杯、500は口縁がやや外反する有稜高杯である。501は口縁が大きく広がる広口壺である。502は手焙の覆部を残す破片から図化している。磨耗により表面の調整は不明。503は庄内式甕Bである。

504～546は1層から出土した。甕は504・505が弥生形甕A、506～508が庄内式甕A、509が庄内式甕B、510～514が布留式祖形甕、515が布留式甕である。516～522は壺で、直口壺516～518、複合口縁壺X521・522などがある。鉢には小形で丸底の鉢523、小形鉢B532がある。小形丸底土器の524・525は口縁が発達していない。526は粗製の小形甕であろう。527・528は有段口縁鉢である。529は有稜高杯C、530は有段高杯、531は高杯脚部である。533～536・538・539は小形器台B、537・540は小形器台Cである。その他、蛸壺541、土鍋542、製塩土器543～545、大形鉢546などが検出された。

### SW1159

#### 1. 遺構 (Fig.87・88, PL. 8)

A-1区、C11HW付近のS D1305堆積土中から検出された土器溜である。4層中で検出されており、2～3層検出の他の土器溜 SW1360～1366より層位的に下層に位置する。土器検出面の標高は6.2m前後で、各土器ともほぼ安定して面的に出土している。大溝の方向に沿うように南北に長く土器が分布し、その範囲は南北3.8m、東西0.4mであった。土器は大きく3群に分かれて検出されている。最も南には壺562・高杯551、最も北には複合口縁壺572があり、他の個体はその中间に集積された状況を示す。複合口縁壺572は体部の上半と下半が分離しており、原位置から若干の移動を伴う可能性がある。甕の個体数が多く、出土土器の器種の中で主要な位置を占めているが、その配置に特に規則性を認めることはできなかった。

#### 2. 遺物 (Fig.89～91, PL. 95・96)

器種には甕(547～561)、壺(562～572)、高杯(563～566)、製塩土器(567～571)が認められた。

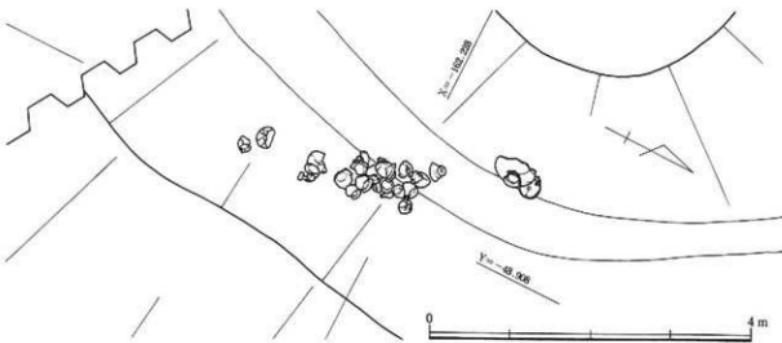


Fig. 87 SW1159平面図

甕はすべて弥生形甕Aである。遺存状態が不良で固化不能であった大形の弥生形甕1点を含めて、合計16点が出土した。いずれも右上がりを主としたタタキ成形が行われている。口縁端部の形態は、口縁f・hが主体的である。547・548は超小形のAe, 549～553は小形のAd, 555～560は中形のAc, 561はおそらく大形のAbに分類される。

甕562は肩部以上を失っている。体部は倒卵形を呈し、外面を全面的にミガキAで仕上げる。複合口縁甕Xの572は平底と思われる底部を欠く他は完存している。玉葱形の扁平な体部を有し、頸部は肩部から広口甕口縁状に大きく広がり、さらにやや内湾気味に広がる口縁を付加している。頸部に突帯を貼付けて刻目を巡らせるが、全体的に鈍重な作りで装饰性に乏しい。

563は比較的短い脚部をもつ有稜高杯Aである。脚柱部は半中実となっており、脚部566はやや長めの脚柱部をもつが、ほぼ同形態である。この他、脚部565はほぼ中実、566は中空部分が多い。いずれも脚柱部、脚裾部が明瞭に区別される。

製塙土器はいずれもBで脚台のみが出土した。タタキ痕を残す567～570、ナデによる571がある。

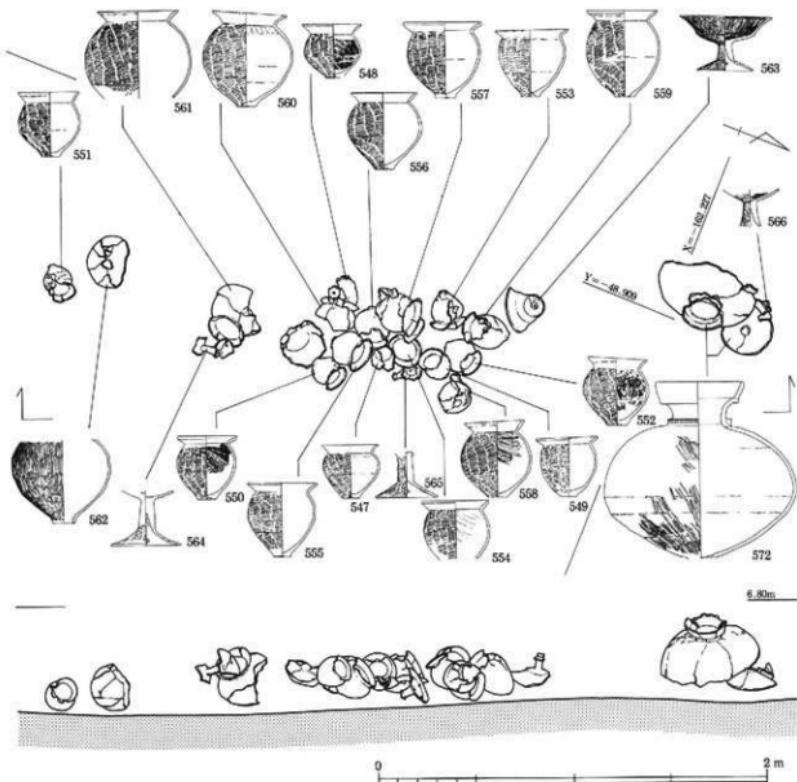


Fig. 88 SW1159遺物出土状況図

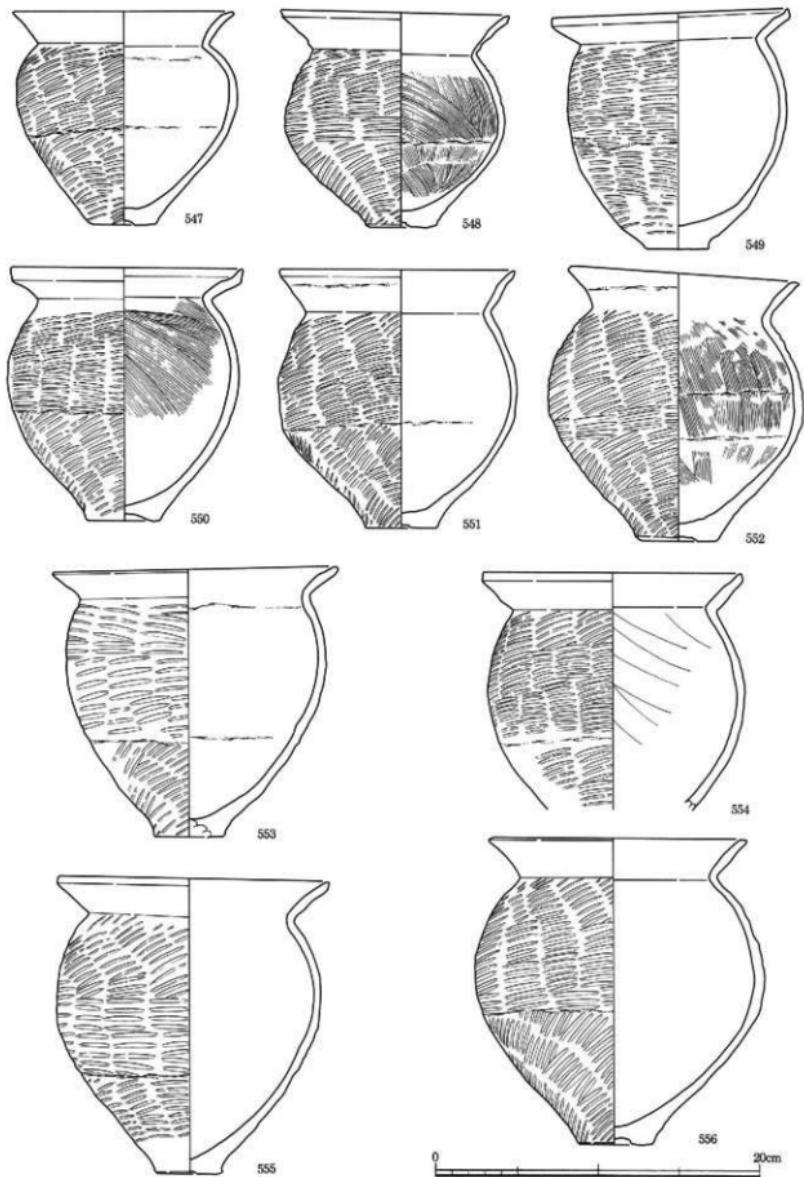


Fig. 89 SW1159出土遺物実測図(1)

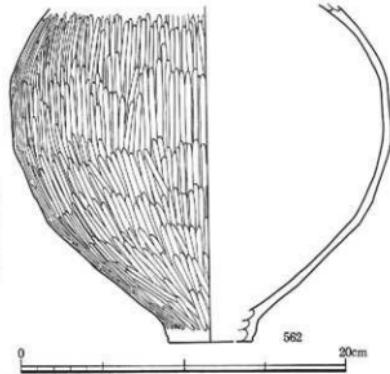
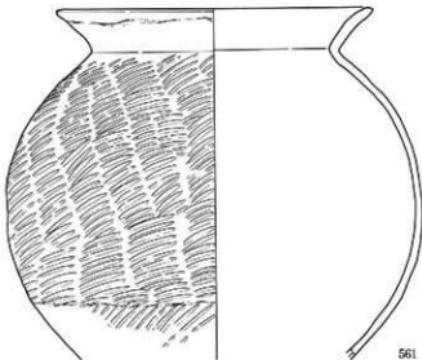
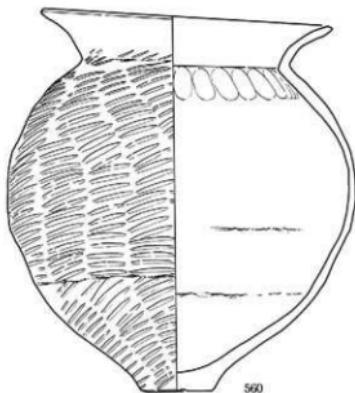
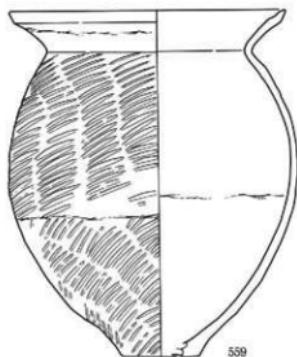
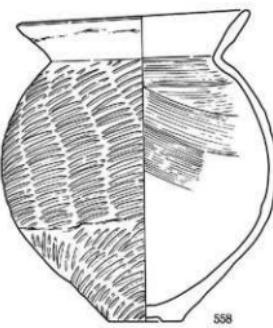
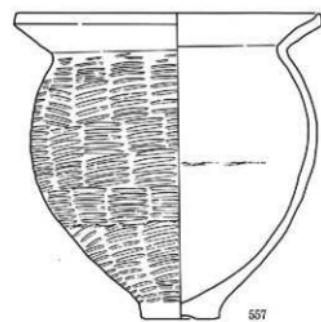


Fig. 90 SW1159出土遺物実測図(2)

0 20cm

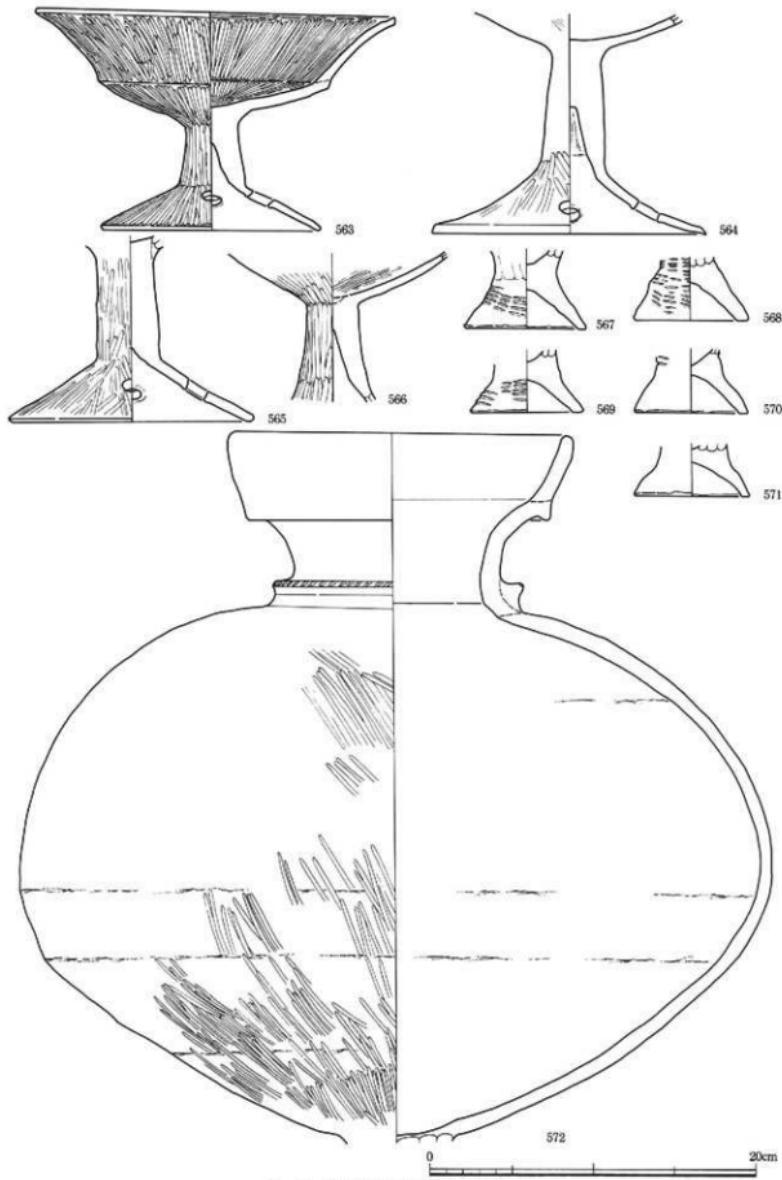


Fig. 91 SW1159出土遺物実測図(3)



Fig. 92 SW1360～1366平面図

## S W1360～1366

## 1. 遺構(Fig.92, PL. 9)

S D1305の堆積層、2～3層には古式土師器を主体とする土器、土器片が多量に包含されていた。これは大溝が廃棄遺構と化し、周辺から土器の連続投棄が行われたことによる結果と思われる。調査時においては、堆積土中の土器分布密度が比較的高いため、かえって分層発掘が困難な状況に陥った。このため特に土器が密着し、あるいは連続して検出された箇所を保存して土器集積を確認し、比較的一括性の高いと思われる土器群の抽出に努めた。その結果、大溝の底、及び西側斜面から細別7群の土器溜が確認された。土器溜の認識は一括性を重視するため慎重を期し、土器の集中度の高い部分を目安として便宜的に区画しており、実際には一部が統合されることもあり得る。これらの土器群は2～3層のいずれかの層位に帰属する。以下、各土器溜ごとの土器組成をみる。

## 2-a. S W1360～1362(Fig.93)

いずれもC11 E Sに位置する土器溜である。S D1305の西斜面にあり、検出標高は6.7m前後で3.9m

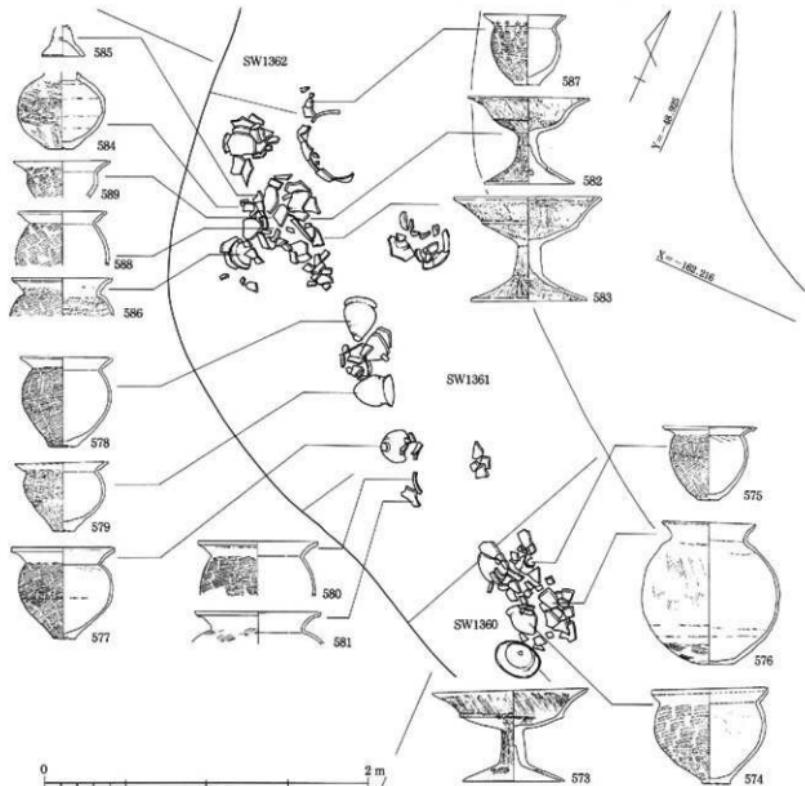


Fig. 93 S W1360～1362遺物出土状況図

の範囲で帯状に分布しているが、土器が連続せず途切れる部分があるため三分した。しかし土器様相からみて同時期、あるいは近接した時期に形成された可能性が高いといえよう。

## 2-b. 遺物(Fig. 94~96, PL. 97)

SW1360は高杯、甕、壺で構成される。573は有稜高杯Aで、体部と口縁部の接合部を強調する。574・575は弥生形甕Aで、口縁端部の拡張の強い口縁d(574)、拡張の弱い口縁f(575)がある。タタキ成形痕をよく残し、体部は平底をもつ扁球形、あるいは倒卵形である。576は口縁が「く」の字状に外反し、丸底に近い平底をもつ球形体部の広口壺で、タタキ成形のち縦方向ハケを加える。やや粗製。

SW1361は甕のみで構成される。いずれも弥生形甕Aで、口縁部拡張の強い口縁e(577)、拡張の弱い口縁f(580・581)、丸くおさめた口縁h(578・579)がある。体部の成形はすべてタタキによっており、圧縮された倒卵形を呈する。

SW1362は高杯、壺、甕、製塙土器で構成される。582・583は有稜高杯Aである。脚柱部内面は中空に近い582、円錐形に窪む583がある。584は口縁を失っているが器種は壺と思われ、ほぼ球形の体部に突出しない平底を備えている。製塙土器B585は脚台のみが出土しており、タタキ成形痕を残している。586~589は弥生形甕Aである。口縁端部を上方に拡張した586、外面に端面をもつ588、丸くおさめた587・589がある。いずれもタタキ成形されている。589はかなり扁平な体部となろう。

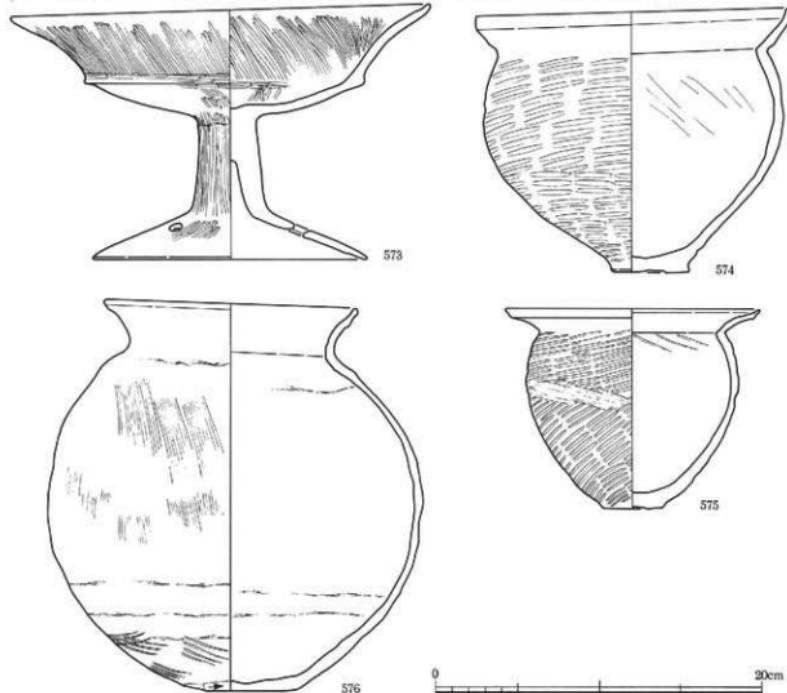


Fig. 94 SW1360出土遺物実測図

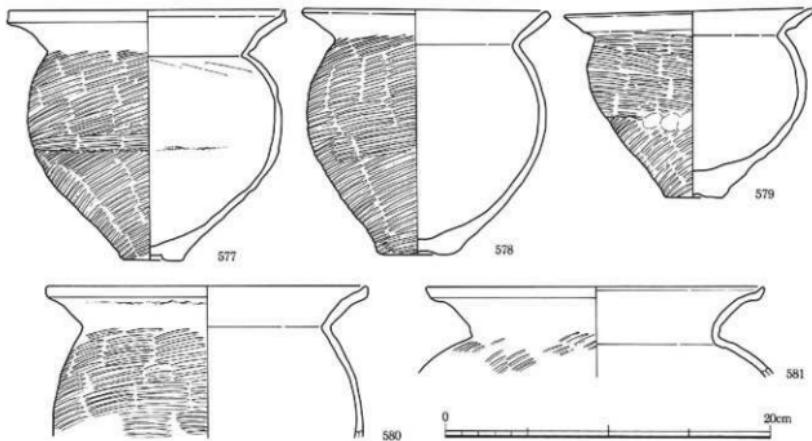


Fig. 95 SW1361出土遺物実測図

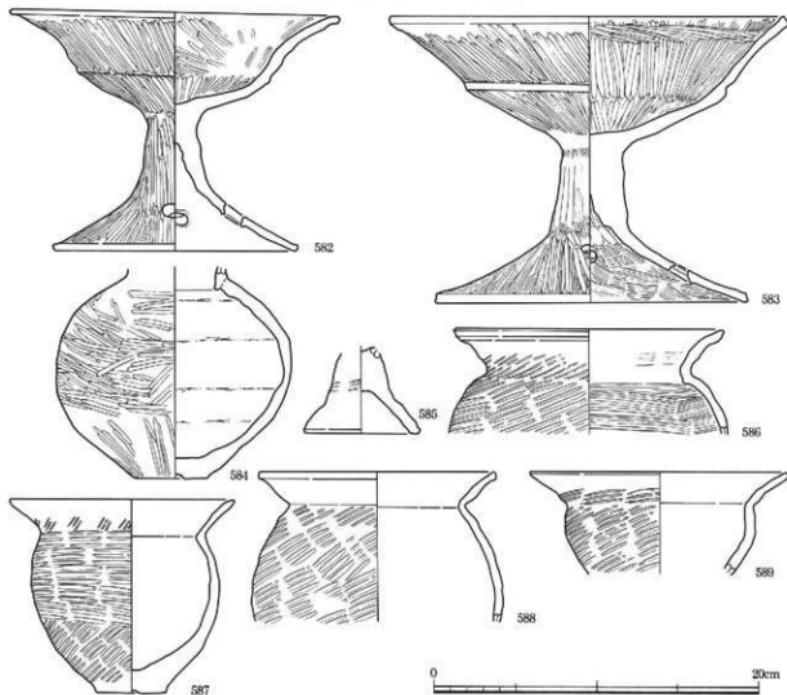


Fig. 96 SW1362出土遺物実測図

## 3-a. SW1363(Fig. 97)

C11D S付近に位置する土器窯である。S D1305のある時点での溝底に相当すると思われる。検出標高6.4m前後、南北2.5m、東西1.3mの範囲で面的に分布する。

## 3-b. 遺物(Fig. 98・99, PL. 98・99)

甕(590～606)、壺(607)、高杯(608～612)、鉢(613～616)、小形丸底土器(617・618)、器台(619～625)などから構成されている。

590～599は弥生形甕Aである。タタキ成形を基本としているが、体部や口縁部の調整にハケを併用する595・598がある。592・598など、頸部のくびれがかなり緩やかな側体がある。口縁端部は明瞭に上方に拡張され、外面に端面をもつ口縁e(592・595)などがある。600～602は庄内式甕Aである。完形に近い601では、極細の平行タタキの後、肩部直下までハケが及ぶ球形の体部を有する。603～606は布留式祖形甕である。口縁端部は内外面共にやや拡張され、外傾する端面をもつ口縁oで、604・605はやや内湾の傾向がある。体部は603・606ではタタキ成形により、603はハケ、606はナデで仕上げられ、また606は分割成形痕が明瞭である。

607は広口壺Aである。やや扁球状の体部に突出した底部を備える。

608はミガキB・Cを用いた有棱高杯Cである。609は有棱高杯Aで、直線的な口縁をもつ。脚柱部は中実で、脚柱部と脚裾部の輪郭はシャープである。610・611は有段高杯であるが、外面の調整は610がミガキA、611がミガキBと異なっている。いずれも口縁が強く屈曲し、有段部が強調されている。612

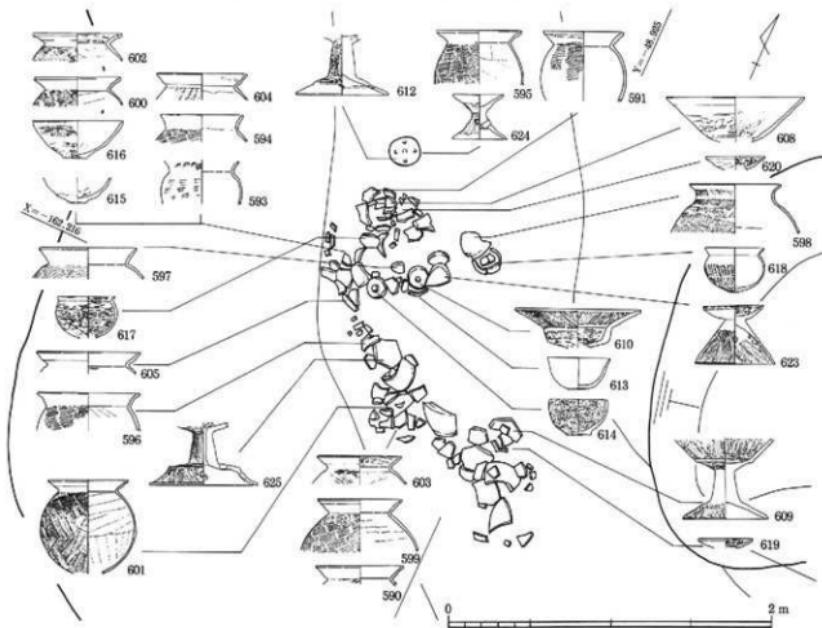


Fig. 97 SW1363 Relic出土状況図

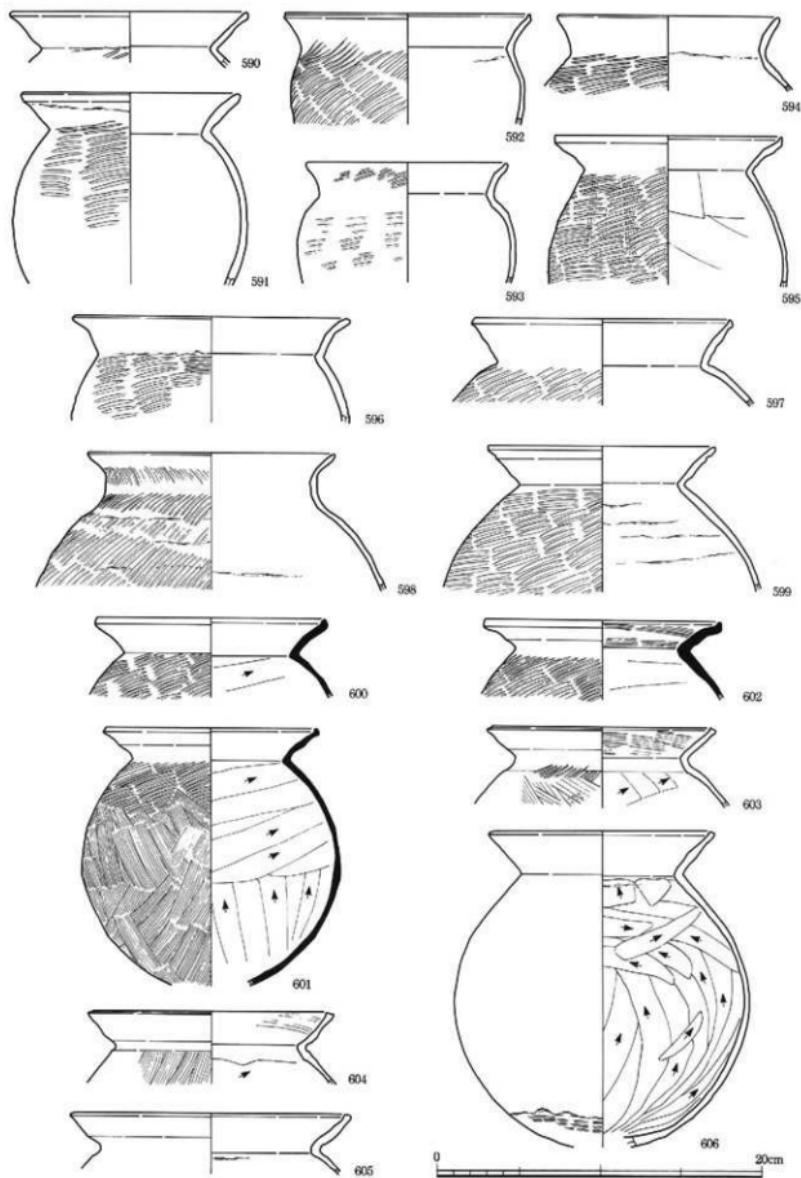


Fig. 98 SW1363出土遺物実測図(1)

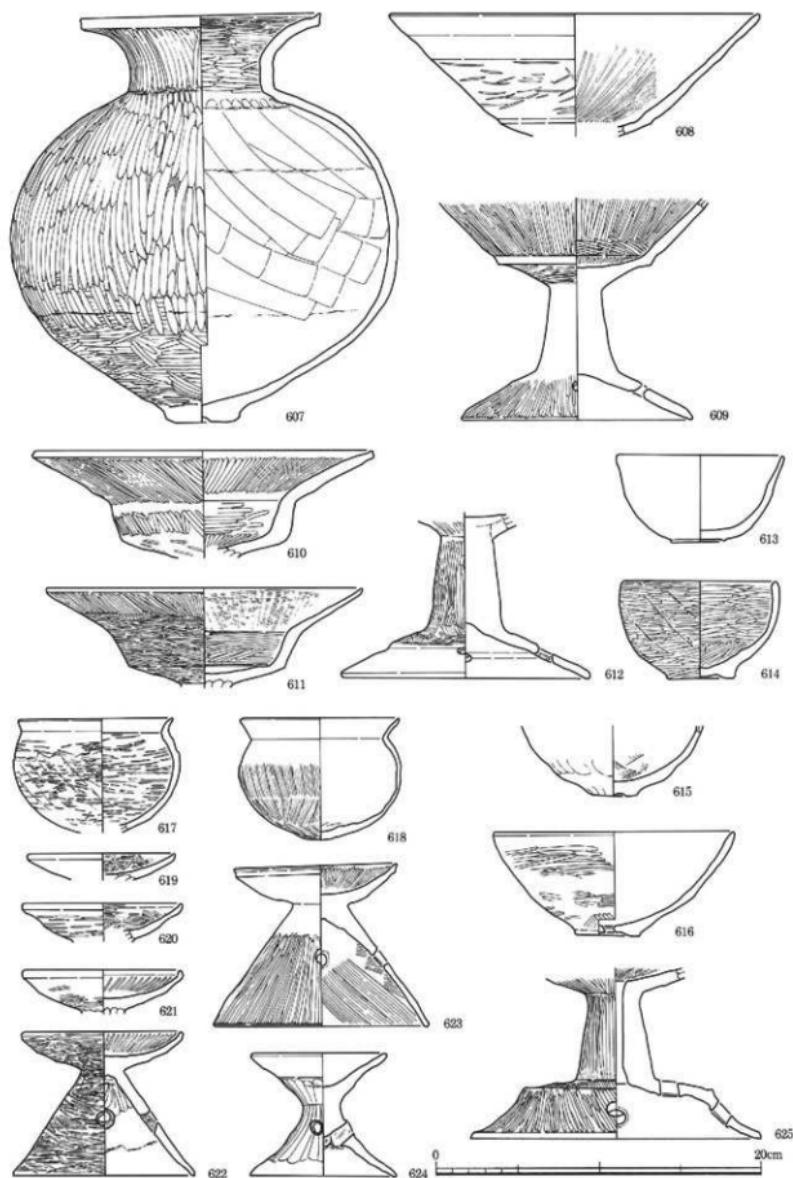


Fig. 99 SW1363出土遺物実測図(2)

は有段高杯の脚部と考えられ、脚裾部に低い段を設けている。ミガキAで調整される。

613~615は小形鉢Aである。体部は半球形の椀状を呈し、また底部の突出は僅かであり、底部自体が痕跡的である。614は内外面共に横方向ミガキA、他はナデ仕上げによる。616は有孔鉢Aである。

617・618は小形丸底土器である。いずれも扁球状の体部に短く外反する口縁部を備える。器径は口径を凌駕している。618はほとんど痕跡的な狭い平底を僅かに突出させている。617は内外面ともにミガキBを密に加えるが、618は外面ハケ調整とナデによっている。

619~624は小形器台Bで、口縁端部の形状から分類すると622がB<sub>1</sub>、619・623がB<sub>2</sub>、620・621がB<sub>3</sub>となる。最終器面調整は外面ナデによる619、ミガキBによる620~622、ミガキAを用いた623がある。624は極めて粗製の小形器台Xで、3方透孔が内面で切り合っている。625は脚裾部に強い屈曲をもつ有段部を設けた有段器台で、脚柱部の中心を貫通する孔を設ける。4方透孔を有段部の上下に45°ずらして配置する。外面と受部内面にはミガキAが施されている。

#### 4-a. SW1364(Fig.100)

C11D S付近に位置する土器窪である。S D1305の西斜面に認められ、検出標高は6.5m前後で、南北2.4m、東西1.2mの範囲で面的に集合して分布していた。

#### 4-b. 遺物(Fig.101~103, PL.100~101)

壺(626~648)、壺(649~653)、小形器台(654)、鉢(655~658)、高杯(659~667)などを組成とする。

壺はすべて弥生形壺Aである。超小形の626・627・635、中形の638・639、大形の645などがある。中形以下の壺では体部形状が上下にやや圧縮された倒卵形、もしくは球形に近い形であるが、底部は基本的にやや突出させている。口縁部形状では632・635・637などが口縁端部をやや拡張させて明瞭な端面を作っている。また629~631などのように、口縁の屈曲が緩い個体も散見される。大形の弥生形壺A aの645は、出土状況から他の個体との一括性を認め得るが、口縁部外面に弱い稜線を有すること、長胴傾向が強いことなど、型式学的には古い特徴を残している。

649は広口壺Aである。頸部から大きく開く口縁をもち、端面を有する。650は広口直口壺で、頸部から緩やかに広がる短い口縁部を附加する。651・652は球形体部をもつ小形の壺で、僅かに突出する平底をもつ。口縁部形態は不明であるが、内湾して広がるようである。複合口縁壺Xの653は、頸部と口縁部の接合部分では屈曲がかなり緩い。

654の小形器台XはSW1363の組成中にみられた624とはほぼ同形態の粗製品で、口縁部はナデ、くびれ部以下はヘラナデで調整されている。

655~657は小形鉢Cで、浅い椀状か半球状の体部に、外側に短く広がる口縁を付加する。いずれもやや突出した平底をもつ。655は口径に対して体部が浅く、口縁部に内湾の傾向がある。658の有孔鉢Bはタキ成形痕を残し、平底と僅かに内湾して立ち上がる体部・口縁部をもつ。

659~662は有稜高杯A、663はXである。いずれも口縁部の屈曲が弱く稜径が比較的大きい。ミガキAによつては全面を調整されている。脚部については、脚裾部が内湾する660、直線的かやや外反する661・662などの相違がある。また脚柱部内面はいずれも上半が中実で、下半に円錐状の窪みを有する。663は他の有稜高杯と比較して、口縁部の屈曲、ミガキ調整法において異質であり、搬入土器の可能性もある。664は体部から屈曲した口縁部を附加した有段高杯である。杯部外面にミガキB、内面は口縁部・体部にミガキCを加える。665~667は椀形高杯Bで、いずれも半球状の杯部、短い脚柱部、大きく扁平に近い形で広がる脚裾部を備える。脚柱部内面中央は僅かな窪みを有する。

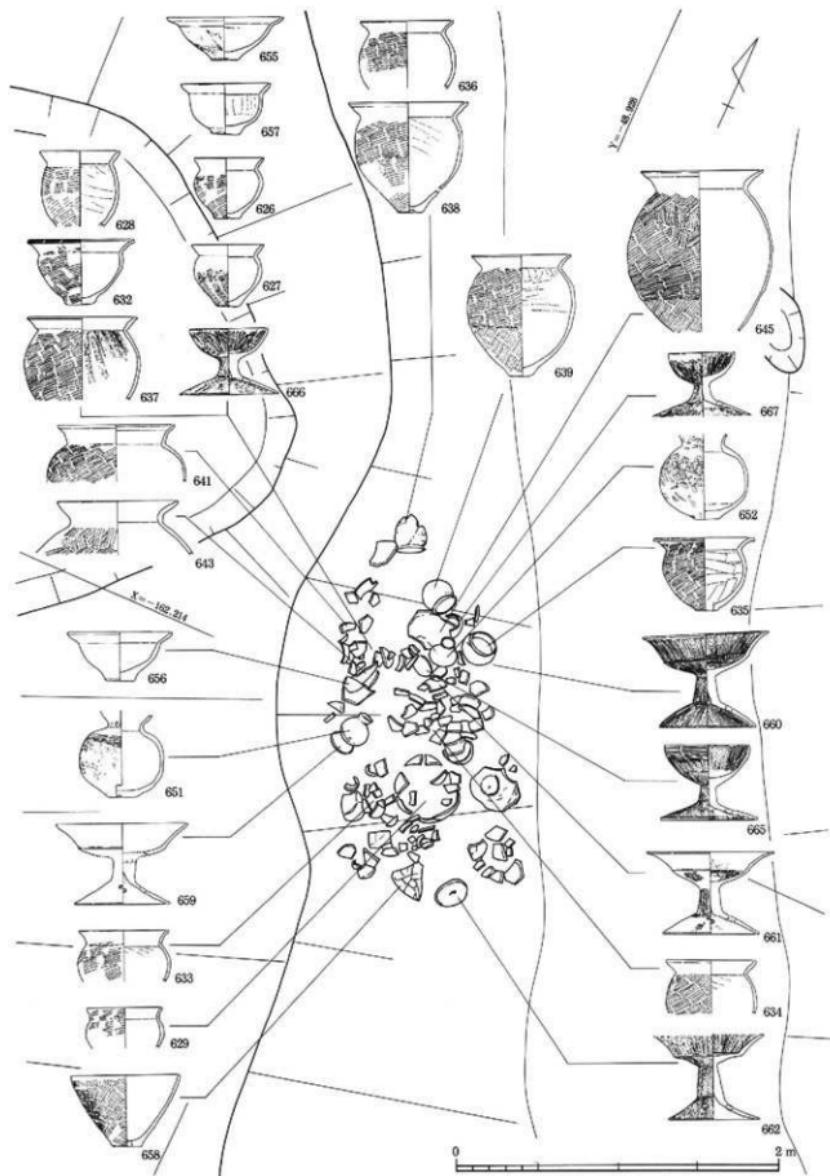


Fig. 100 S W1364遺物出土状況図

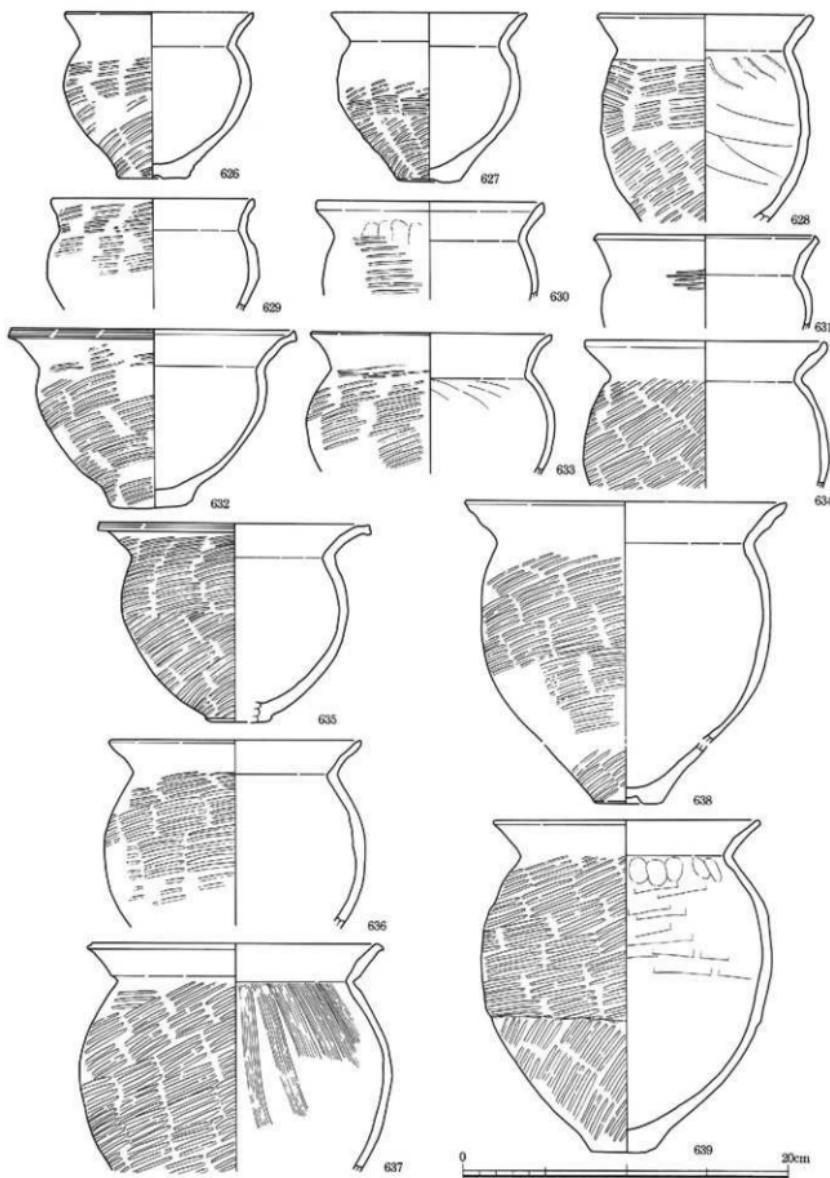


Fig. 101 SW1364出土遺物実測図(1)

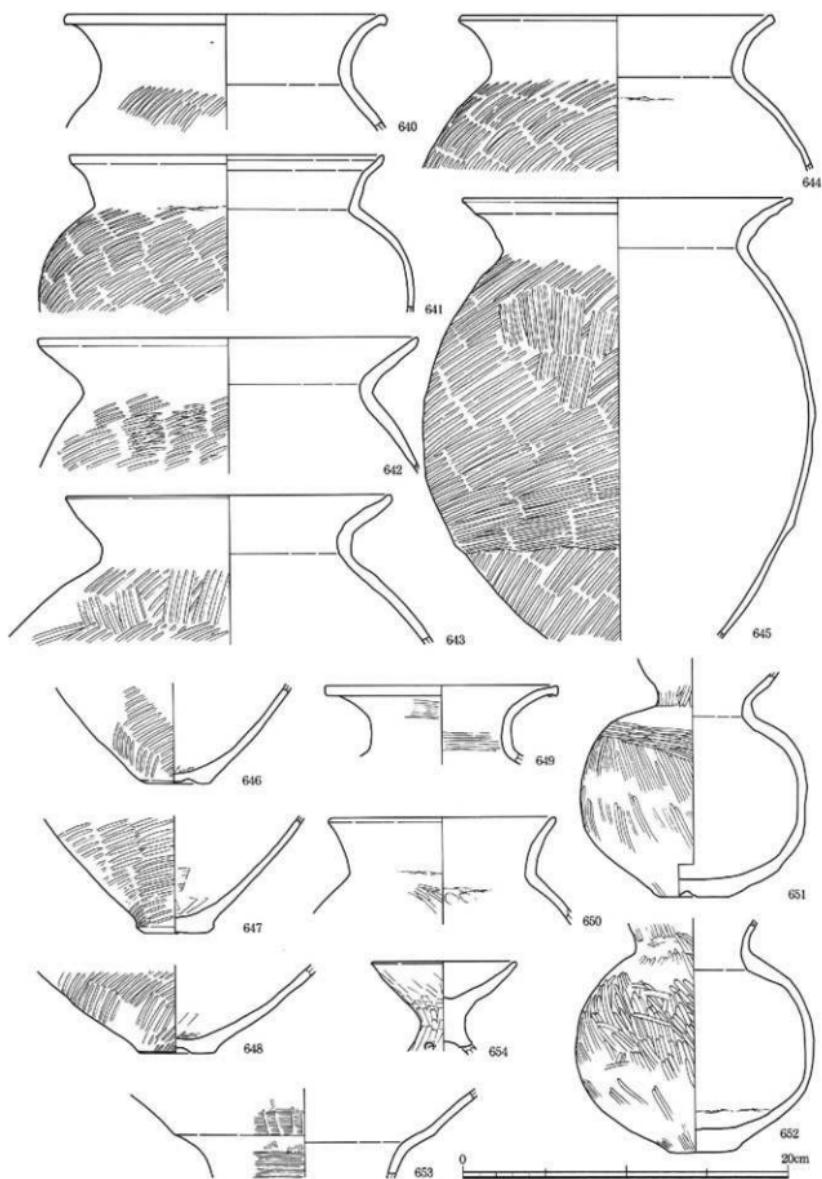


Fig. 102 SW1364出土遺物実測図(2)



Fig. 103 SW1364出土遺物実測図(3)

5-a. SW1365 (Fig. 104)

C11C R付近に位置する土器窪で、ある時点での溝底に相当すると思われる。検出標高6.4m前後、南北2.9m、東西1.1mで面的に分布する。土器の集合が僅かに離れた部分があるが、同じ標高で近接して検出されたこと、また土器様相も矛盾しないことから一括性を認める。土器群の中には直径25cm前後の4個の円形粘土塊が存在し、同様の粘土塊は南側1.5~3mの溝底でも検出されている。

5-b. 遺物 (Fig. 105, PL. 102)

甕(668～672・674), 壺(688), 高杯(675・676・678～680), 脚台(677), 小形丸底土器(681), 小形器台(682～687), 製壺土器(673)などで構成される。

668はナデ仕上げの小形の斐X、669～671は口縁部から肩部にハケをよく残した布留式粗形斐で、670・671は頸部直下までケズリを加える。布留式粗形斐672は斜方向にハケ調整した球形体部をもつ。674は庄内式斐Bで、やや尖底傾向のある球形体部とやや上方に拡張した口縁部を備える。体部成形は細筋タタキのち底部周辺に縱方向ハケを加えている。

688は直口壺で、球形の体部をミガキAで調整後、口縁部から頸部にかけてミガキBを加える。

高杯には低脚高杯の675・676、有稜高杯Cの678、椭形高杯Bの679・680がある。脚台677の器種は台付鉢もしくは底脚の高杯の可能性をもつが断定できない。

小形丸底土器 B681は扁球状体部に内湾した短い口縁部を付加する。外面はミガキ Bによる調整。

小形器台は684・685がB<sub>1</sub>、683・686がB<sub>2</sub>である。682～686では外面の調整はミガキBによっている。

687は脚部があまり広がらず外観調整もミガキAによる点で、他と比べて異質な小形器台Xである。

673は縦方向のハケ調整を加えた製塙土器Dである。尖底気味で長胴の体部をもつ。

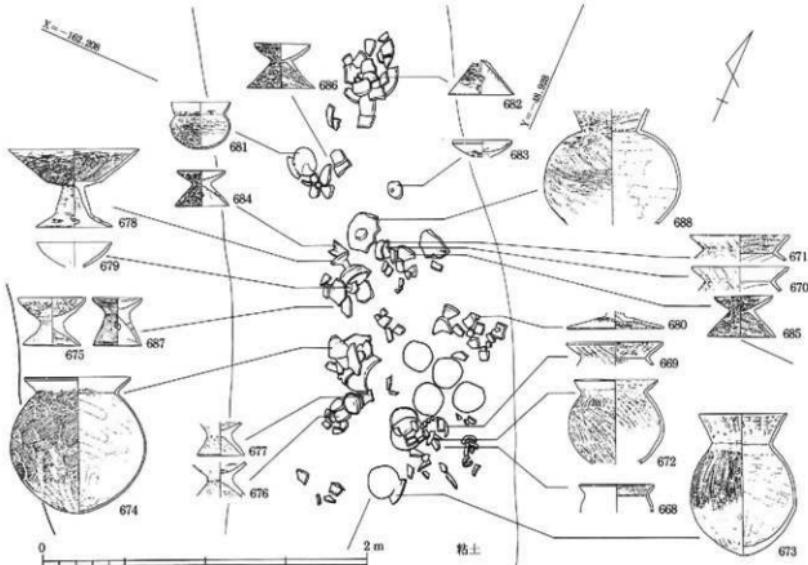


Fig. 104 SW1365遺物出土状況図

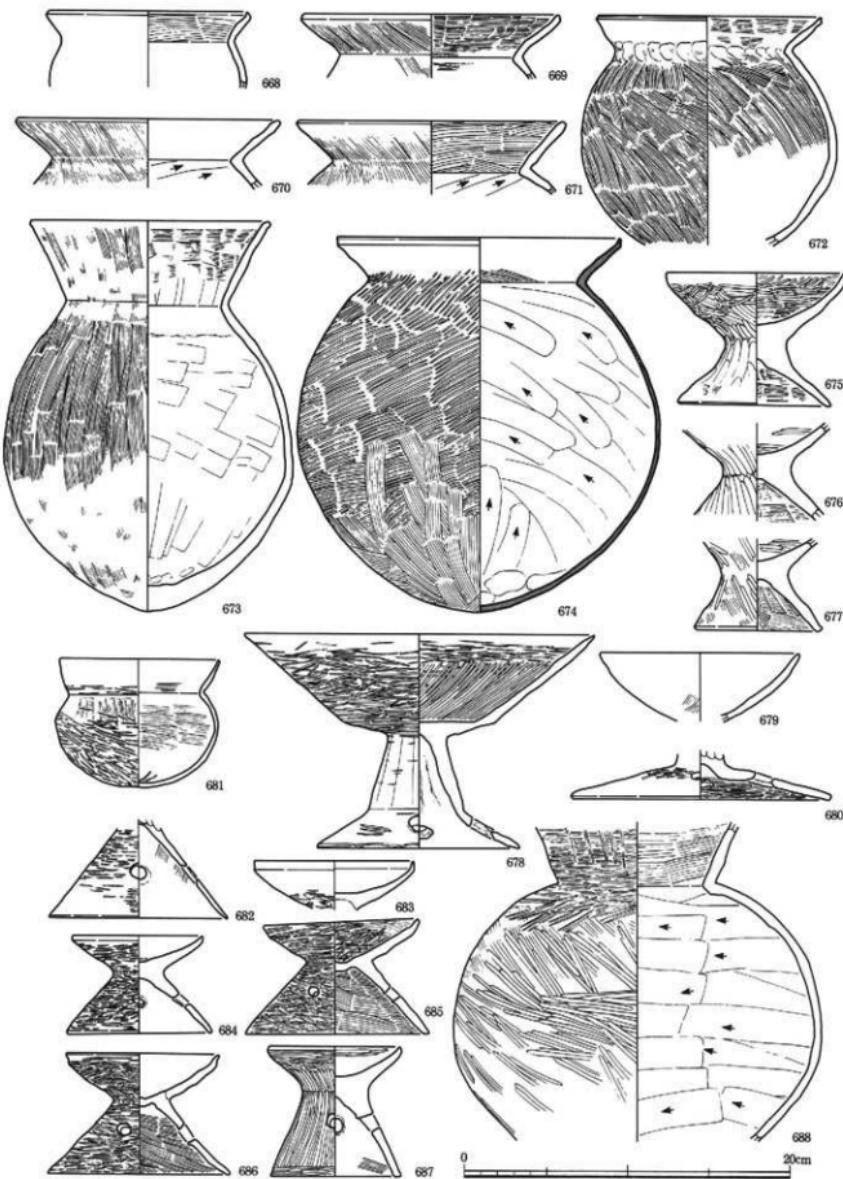


Fig. 105 SW1365出土遺物実測図

## 6-a. SW1366(Fig.106)

C11CRに位置し、SD1305の西斜面に認められる。検出標高は6.8m前後で面的に分布する。

## 6-b. 遺物(Fig.107)

器種には甕(689～693)、壺(694)、製塩土器(695)、鉢(696・697)がある。

甕はいずれも弥生形甕Aで、689は口縁端部を上方に拡張し、690・693は口縁部の屈曲が緩いなどの特徴をもつ。

694はSW1364出土の651などと同様、小形の壺の底部と思われる。

695は製塩土器Bの脚台部であろう。

696はタキ成形の有孔鉢で底部の有孔部が突出する。697は大形鉢で、内外面共に密なミガキAを施している。

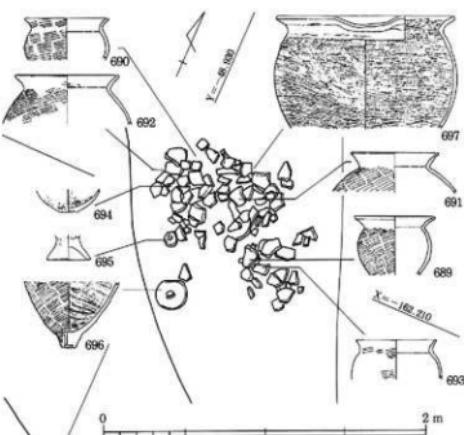


Fig. 106 SW1366 Excavation Status Map

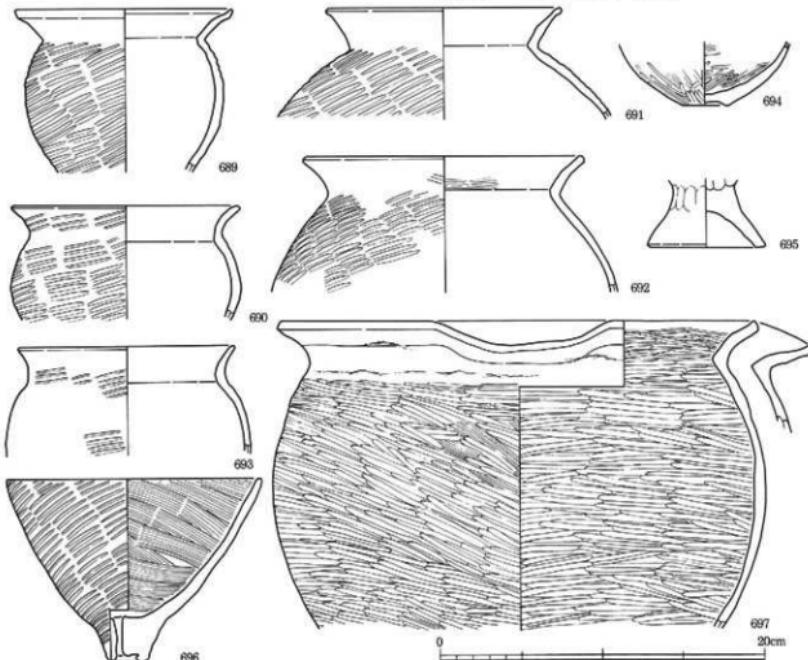


Fig. 107 SW1366 Excavation Artifacts Actual Measurement Drawing

**S D 2206****1. 遺構(Fig.108~110, PL.10)**

B-2区の北西端部、C120R周辺で検出された大溝である。緩やかに蛇行しながら南から北へ延びる部分が検出されており、それぞれ調査区外に及んでいる。これが大溝の本流にあたり、またその西側では小規模な浅い溝を合する。検出長は33.8m、幅6.8~10.6m、深さ2.2mである。流水方向は南から北へ向かうと考えられる。大溝の東側に接するように堅穴住居S A 2216~2219が連続して構築され、また西側にはS A 2224が営まれている。溝の西側は擾乱によって大きく損壊を受けている。

溝内部の堆積土は3層に大別され、上層から下層へ1~3層とする。3層から中期弥生土器、2層から後期弥生土器、1層から後期弥生土器・古式土師器が出土した。

堆積土に包含された土器について、出土層位ごとに述べる。なお、1層中には夥しい量の土器片が包含されていた。その一部については平面的に検出したが(Fig.108)、これは隣接した住居からの投棄行為に由来する堆積と思われ。これら弥生土器・古式土師器はS D1305・4層以上から出土した遺物と質的、量的に匹敵する内容をもつものであった。しかし遺存状態が著しく不良であり、また一括りの検討に時間を割くことができなかったので、ここではその一部を掲載するに留めたい。

**2-a. 3層遺物(Fig.111, PL.103)**

下層に相当する層位で、中期弥生土器の若干量の出土をみている。器種には壺(698~703)、器台(704)、高杯(705)、鉢(706)、甕(707~709)、底部(710・711)などがある。

698・699は広口壺である。698は頸部に接点がない。体部下半に最大径をもち、緩やかに絞られた頸部から外反して広がる口縁に至る。口縁端部を僅かに垂下させ、外面に簾状紋を飾る。また頸部から体部上半にかけて簾状紋を配し、最大径部には波状紋を巡らせる。699は口縁部が外反して水平に延び、上下を拡張した端面をもつ。端面に波状紋、口縁部内面に扇形紋を飾る。700は細頸壺と思われ、垂下した口縁端面に簾状紋を施す。701~703は広口短頸壺である。702はタキ成形痕を残している。703は口縁端部を上方に強く拡張する。

704は器台の体部で、外面には凹線紋を連続的に施している。

705は皿状の杯部をもつ高杯で、杯部は内外面ともミガキAが施され、口縁外面に列点紋を配する。脚部は筒状の脚柱部から脚裾部へ緩やかに広がる。

706は緩やかに内湾して広がる体部をもつ鉢で、口縁端部は僅かに内折される。

707は小形、708・709は大型の甕である。707は体部から強く屈曲した口縁をもち、端面に1条の凹線をもつ。708・709は共に口縁端部を上下に拡張して端面を作り、3条の凹線を巡らせる。

710・711は壺の底部と思われる。710は底面中央に穿孔がある。

**2-b. 2層遺物(Fig.112~114, PL.104・105)**

中層に相当する層位で、後期弥生土器が比較的まとまって出土した。壺(712~717)、甕(718~723)、高杯(724~734)、大形器台(735)、鉢(736~745・748)、手焙(746・747)などの器種がある。

712~714は長頸壺である。いずれも口縁部が外反し、714は口径が口縁部高を凌駕する。715は無頸壺で、口縁端部を外面に肥厚させて段を形成する。中期の無頸壺より小形である。716は広口壺B、717は広口壺Dである。

甕は小形の718や大形の723などがある。718は口縁端部を丸くおさめる口縁hであるが、719~721・723は口縁部外面に緩い段を設け、また明瞭な端面を作る口縁cである。また722は頸部内面に明瞭な稜



Fig. 108 SD2206平面図

を有し、直線的に強く屈曲して明瞭な端面をもつ口縁a形態を示す。すべてタタキ成形によるが、721は体部下半の分割成形接合部に横方向ケズリ、723の体部下半には縦方向ケズリが加えられている。

高杯には724~730の有稜高杯、733・734の椀形高杯、731・732の脚部がある。有稜高杯のうち口縁部の立ち上がりの角度が緩く、口縁部外面に横方向ナデを加えたち波状、あるいは鋸歯状のミガキを施した726~729を有稜高杯A、また口縁部が急角度で立ち上がる724・725をB、小形の730をXとして捉えた。いずれもミガキAを主体とした調整がなされている。725は脚柱部上半が中実、728は緩やかにラッパ状に広がる中空の脚部をもつ。732はミニチュアの高杯脚部で、後者には脚裾部内面に粘土小塊の貼付が数カ所にみられる。733・734は椀形高杯Aで、共に口縁部が緩やかに内湾して広がる形態である。733は内外面ハケ、734はミガキAで調整され、口縁端部直下に擬凹線を巡らせる。

大形器台735は脚据り口縁が大きく広がるBと思われ、体部に3方2段の透孔を穿つ。

鉢には異形の小形鉢X736・737、小形の738~742、中形の743~745、大形の748がある。736はタタキ成形した小形の鉢に、しっかりした脚台を備える。737は浅い壺状の体部に小さい脚部をもつ。この両者は製塩土器の可能性も考えられる。小形鉢にはA(739・740)、B(742)、C(738)、D(741)が認められ、

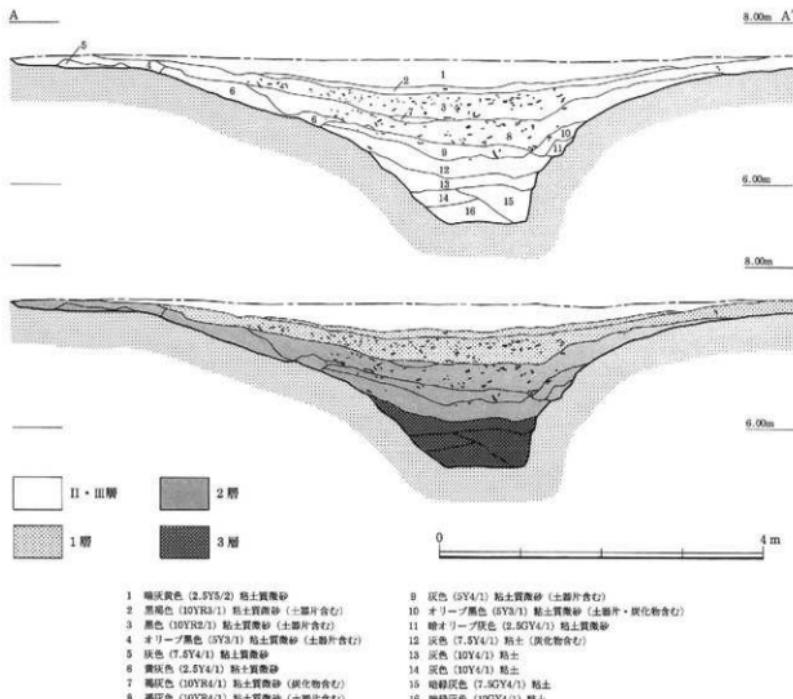


Fig. 109 S D 2206断面図(1)

また中形鉢では口縁部を上方に拡張した743、口縁部を内湾させて外面に段を設けた744・745がある。大形鉢748も口縁部は外面に段を設けて屈曲させており、中形鉢744・745とはほぼ同工である。いずれの内外面も密なミガキAで最終器面調整されている。

746・747の手焙は遺物取上げ時の記録によって中層に入れて報告したが、その形態から他の土器様相が示す本来の組成に含まれない可能性もあり、共伴関係は微妙である。746は体部の一部のみで覆部を欠損する。体部最大径部位に突帯を貼付け、刻目を施す。747は平底をもち、鈍い稜線によって体部の上半と下半が分けられている。覆部の頂はやや尖る。747とほぼ同様の破片が他に1点出土している。

### 2-c. 1層遺物(Fig.115, PL.106)

上層に相当する層位で、後期弥生土器・古式土師器が多量に出土した。壺(749~752)、甕(753~756・759)、小形丸底土器(757)、小形器台(758)、鉢(760)、高杯(761~763)、製塩土器(764~768)などを掲

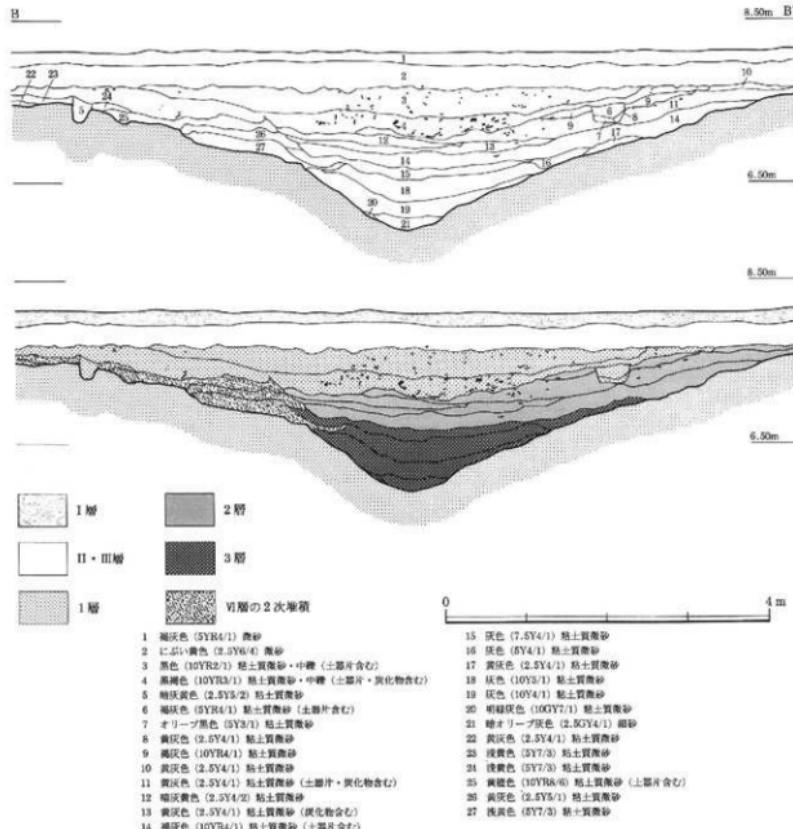


Fig. 110 S D 2206 剖面図(2)

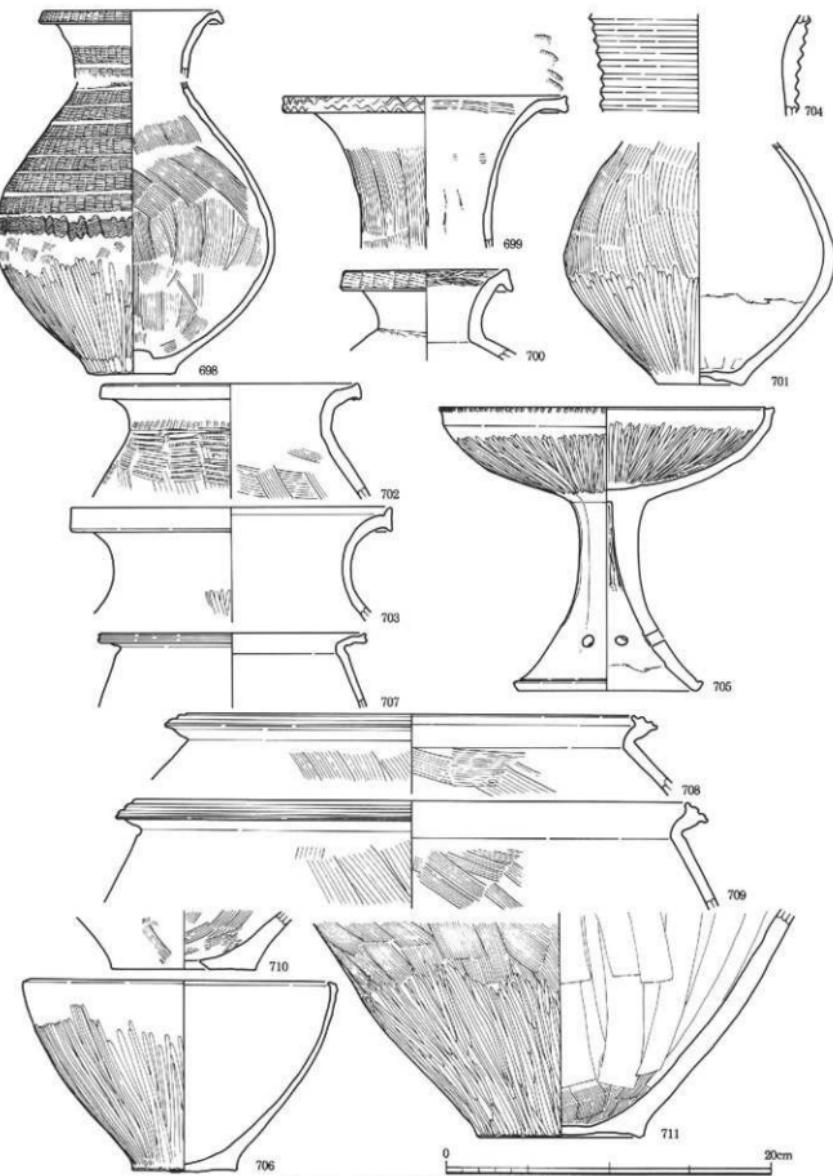


Fig. 111 SD 2206出土遺物実測図(1)

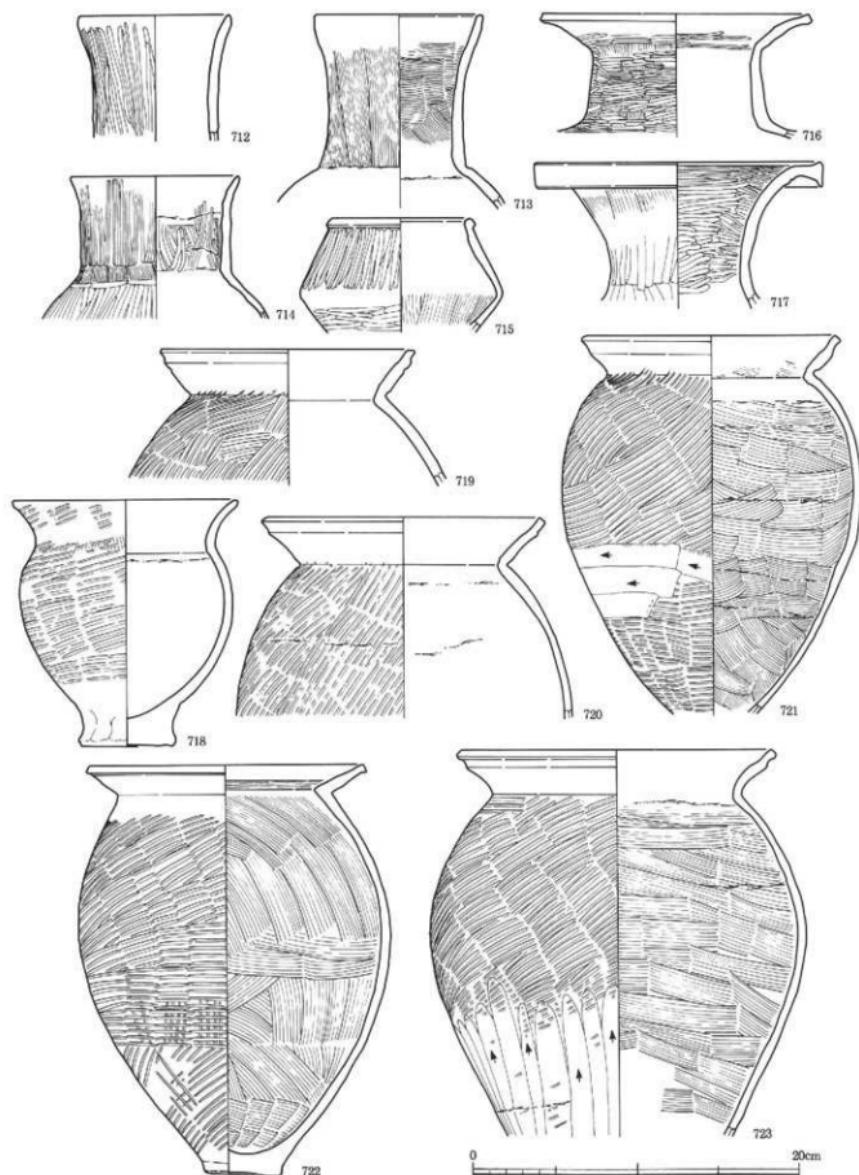


Fig. 112 SD2206出土遺物実測図(2)

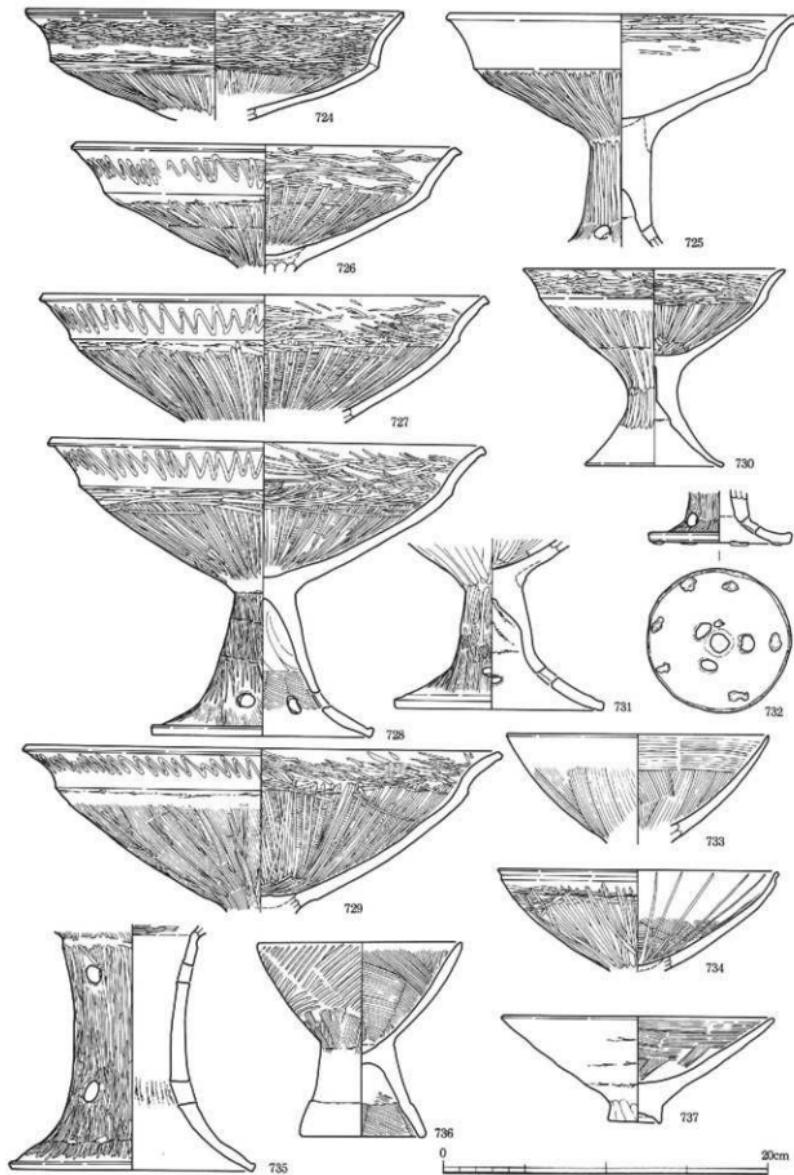


Fig. 113 SD 2206出土遺物実測図(3)

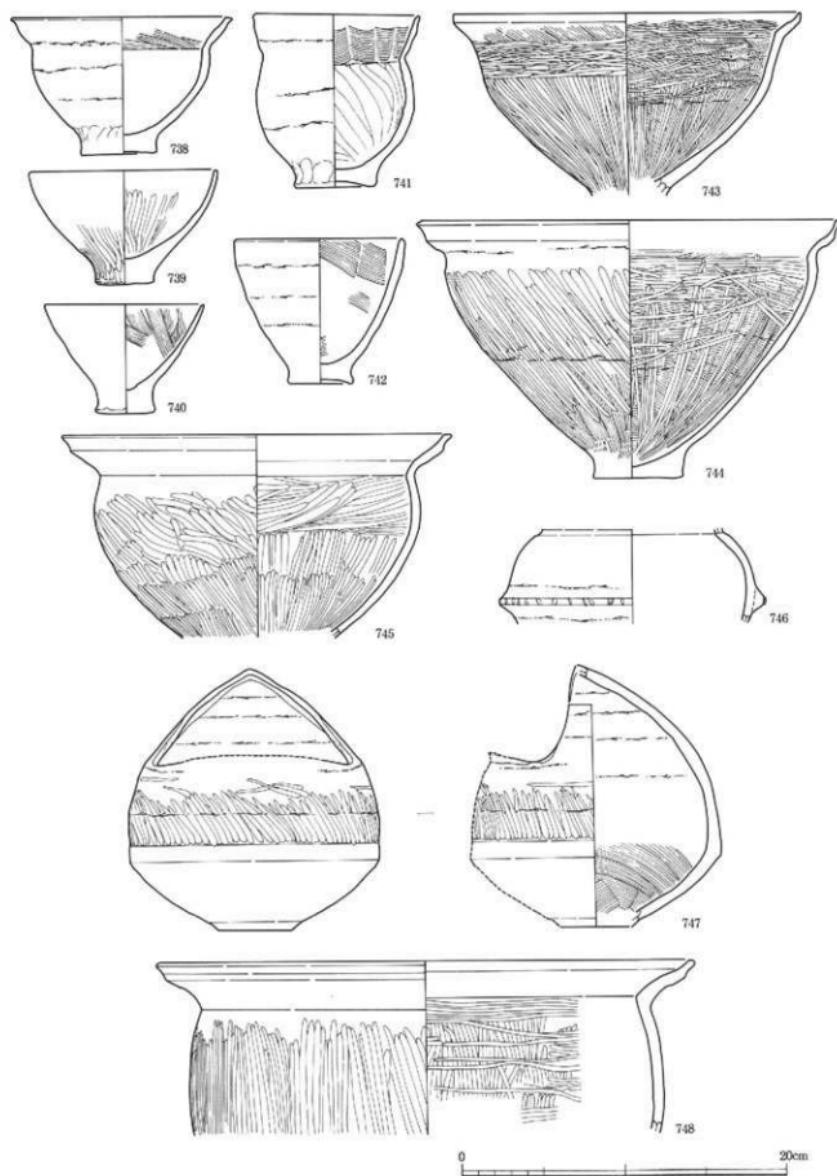


Fig. 114 S D 2206出土遺物実測図(4)

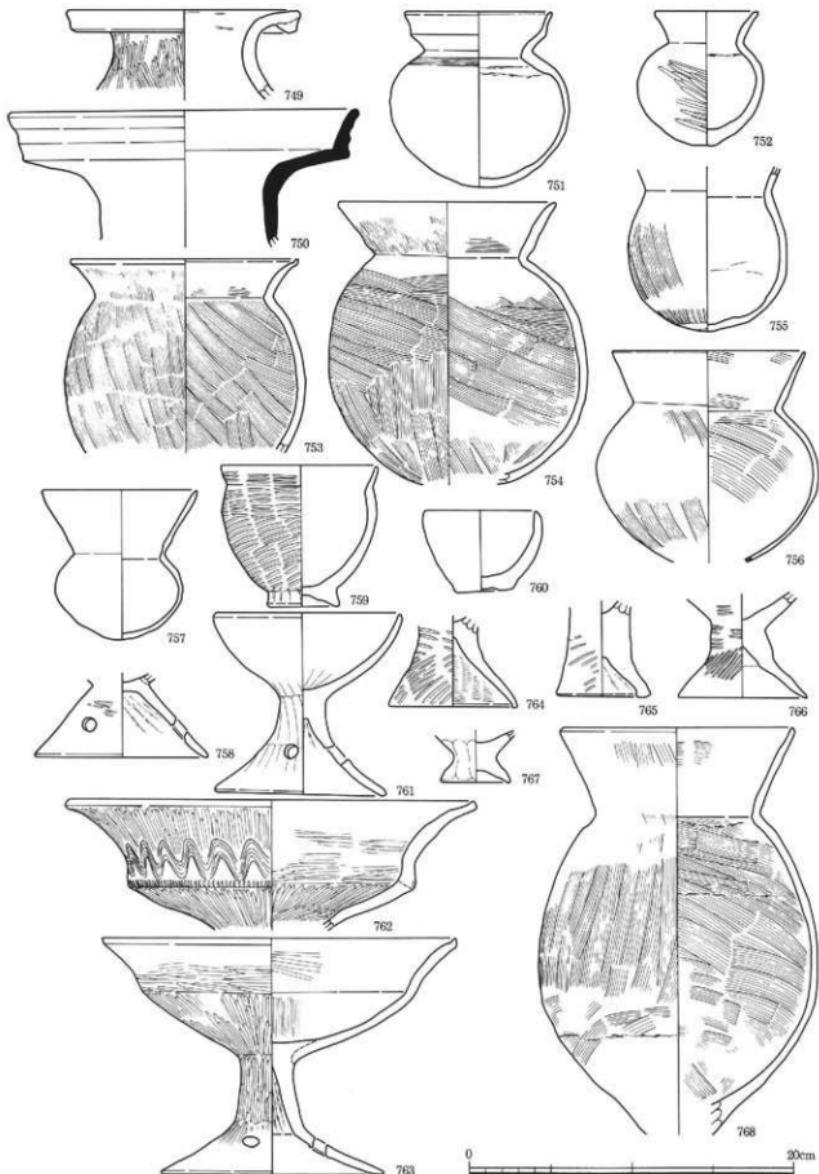


Fig. 115 S D 2206出土遺物実測図(5)

載する。土器量は膨大で、弥生時代後期後半から古墳時代前期までの時期幅を認める。前述の如く遺物自体の遺存状況が著しく不良で、また一括性に欠ける資料が多いことなどから、大半を割愛する。

749は口縁端部下面に粘土帯を貼付けて肥厚させ、口縁端面を作り出した広口壺Dである。750は頸部から受部が大きく張り出し、口縁が強い屈曲をみせる阿波系の複合口縁壺で、胎土に結晶片岩を含む。

751は小形の複合口縁壺で、遺存状態が不良であるが肩部に横方向の弱いハケが認められ、全周させているようである。752は球形の体部をもつ小形壺である。壺には他に長頸壺・広口壺などがある。

753～756は体部ハケ調整の壺で、753・754は「く」の字に屈曲する口縁、球形の体部に斜方向ハケを施した布留式形変である。小形の壺X755・756はいずれも丸底で、755はやや長めの体部をもつ。759は小形の弥生形変である。壺では他に庄内式壺Aが出土している。

757は口縁部がかなり発達した小形丸底土器で、この器種は個体数が少ない。758は小形器台Bである。他に小形器台Cの破片も出土したが、いずれも遺存状態が極めて不良である。

760は底部形態Bにやや内湾して広がる体部をもつ小形鉢Aで、全面をナデで仕上げている。鉢ではこの他に有段口縁鉢の破片などが出土している。

761は椀形高杯A、762・763は有稜高杯Aである。763はミガキAによる通常の調整であるが、762は口縁部外面に波状紋、杯部稜線直上に刻目を飾っている。

764～768は製塙土器で、764～766は内湾気味にふんばった形状のタタキ成形のB、767は椀形体部をもつナデ仕上げのCである。768は全面ハケ調整の製塙土器D。

## SD 1108

### 1. 遺構(Fig. 116～119, PL. 11～16)

A-1区で検出された大溝である。弥生時代中期に存在していた自然流路N R1104は、やがて堆積作用によって大部分の範囲が土砂で埋没する。しかし古墳時代前期には、その北岸に沿って幅を狭めた流路痕跡が残存し、これを大溝S D1108とする。この大溝はN R1104内の堆積土を検出した時点で、帶状に蛇行する痕跡が確認された。当然ながらN R1104の堆積土を基盤としており、検出面の標高は6.7m前後である。検出長は48.5m、幅6～10m、深さ1～1.5mで、N R1104と同様に北東から南西方向に蛇行し、調査区外に及んでいる。この段階ではもはや河道としての機能はほぼ失われており、主流路の移動によって三日月湖の如き閉鎖水域に変貌していたようである。埋土は溝底の形に規制された成層堆積をみせ、3層に大別できる層位を、上層から1～3層、および4層と呼称する。1層はオリーブ黒色微砂を主体とした最大厚56cmの層位である。2層は灰色微砂を主体とした薄い層位が、複数堆積したものをまとめている。最大厚は72cmである。1・2層からは、ほとんど遺物が検出されなかった。3層はオリーブ黒色、灰オリーブ色などの暗色系微砂から構成された層位で、溝底を覆うように堆積している。最大厚は80cmで、特にその下半部には古式土器や木器など、夥しい量の遺物が含まれ、遺物のはば全量がこの層準に由来する。視覚的には有機質に富んだ泥土状を呈しており、遺物の他に貝殻・昆虫・動物骨片・動物歯牙・自然木・木葉・種子・植物纖維など、動植物遺体の包含も認められた。4層はS D1108の両岸に最大厚40cmで堆積した灰色系微砂からなる層位である。これは溝底には全く存在せず、その両岸の斜面を覆うのみである。層位的には3層の下位にあり、3層は4層の形成後に堆積している。溝は4層が形成した斜面下方から急角度で落ち込んでおり、底は平坦に近い断面形状を呈する。こうした堆積状況から3層形成以前の段階において、溝底が浸漬された形跡を窺うことができる。

出土遺物には古式土器・土製品・木器・焼石などがある。これらの遺物は溝底を中心にはば全域か

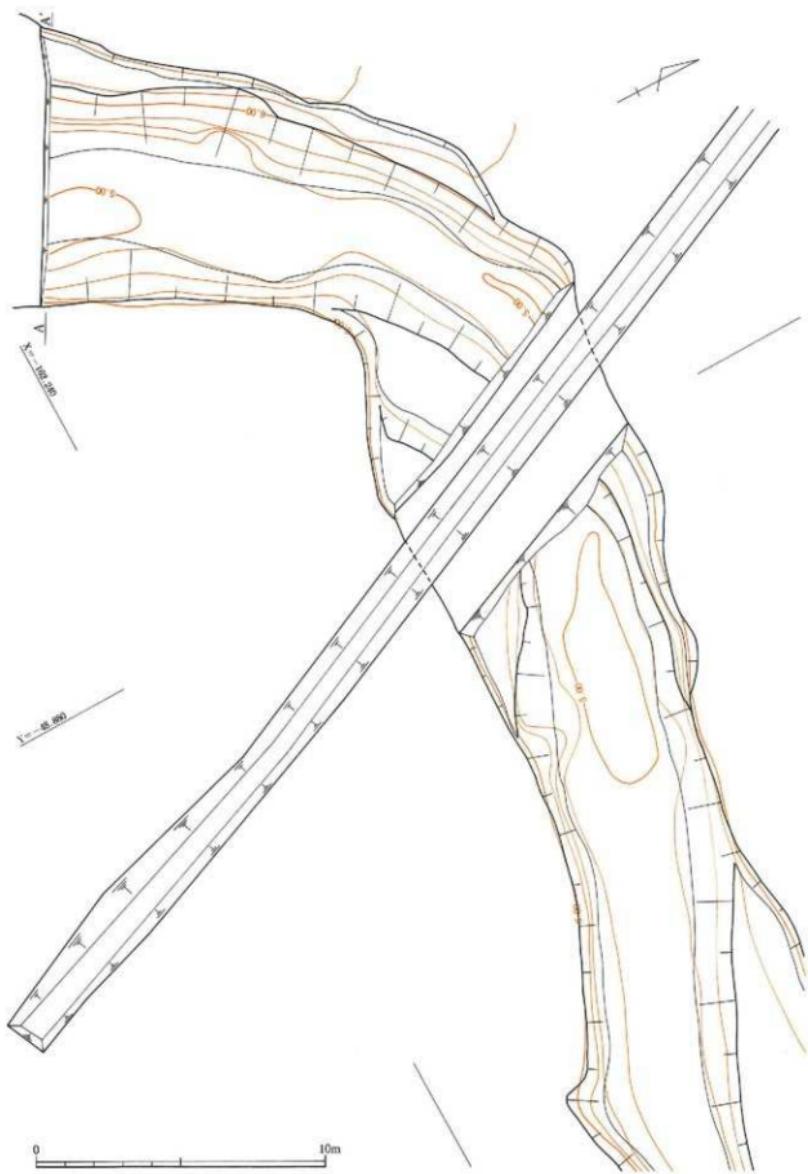


Fig. 116 SD 1108平面図

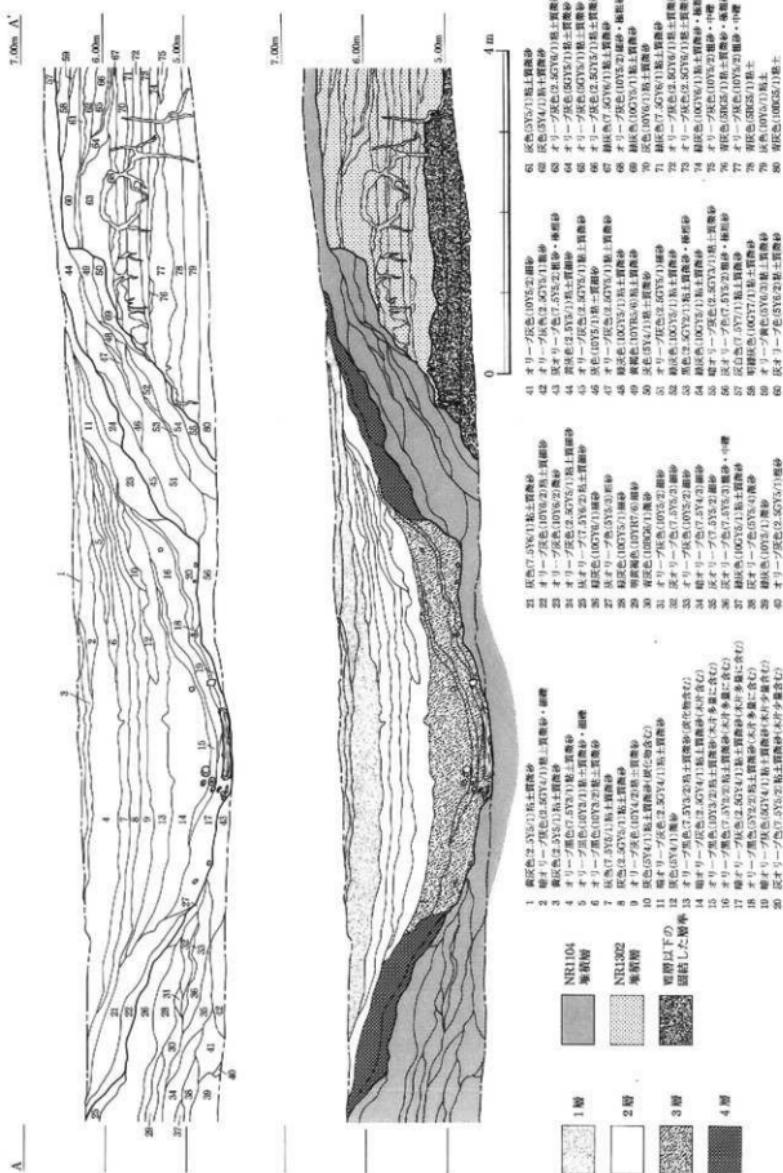


Fig. 117 SD1108断面图

ら出土した(Fig.118・119)。古式土師器は大溝の肩から溝底にかけて検出され、ほぼ全点が3層に帰属する。記録できた範囲内で器種ごとの分布をみると、壺・甕はほぼ全域に分布し、その他の器種では南西半部に集中する傾向が窺える(Fig.120・121)。壺831は7.8m離れた破片同士が接合しており、溝内での土器破片の移動を示すことから、ある程度の流水のあった時期が存在したのであろう。

木器はすべて3層中から検出された(Fig.122)。木器の長軸は概ね溝の方向と一致をみせ、溝底に漂着したような状況であった。検出状況からは環形付木製品W1、刀剣把抜具W2、短甲W3、琴W7などの目立った木器は、調査区の西端付近に集中する傾向があり、鍔などの農具や建築部材は全域的に分布するようである。未製品などの存在から、これらが水漬け状態で貯蔵されていた可能性も皆無ではないが、大半の木器は出土状況から概ね廃棄状況を示すものと思われる。いずれにせよ水漬けの状態で埋没したに相違ない。このことから木質遺物に関しては溝内で漂流することによって、原位置を留めない可能性を認めなければならない。従って大半の木器について、出土位置の関係に積極的な評価は土器以上に見出すことはできない。しかしその中で、比較的集中して検出された木器もある。四方転びの箱ではW8~11・14・15・20が、C12I K付近の3.0mの範囲で帶状に、またW16・17・19・21はC12H I付近の6.9mの範囲で散漫な分布をみせる。いずれも調査区の北東半部に主たる分布域を持つ。またその西側のC12H G付近では木鍤W83・85・93・95・98が4.8m、およびW91・92・94・96がC12G Dの1.7mの範囲でそれぞれまとまって出土している。四方転びの箱では、W8~11の組み合わせがほぼ確実で、このように1個体の製品が分解破損した結果、分布域が接近したと思われる。また使用時に複数が組み合わされる木鍤は、相互に縄などで緊縛されていたか、一括投棄された地点から大きな移動がなかったと考えられる。なお木器の移動距離の長短は、遺物が溝内に位置してから埋没するまでの時間幅にも左右されるであろう。

## 2-a. 遺物：土器・土製品(Fig.123~156, PL.126~147)

混入とみられる微量の中・後期弥生土器などを除き、すべて古式土師器で占められ、また須恵器は1・2層を含め1片も出土していない。器種は壺(769~870・1081)、甕(871~958)、高杯(959~993)、器台(994~1018・1197)、小形丸底土器(1019~1080・1184)、鉢(1082~1183・1185~1196)、製塙土器(1198~1219)、婧壺(1220~1226)、土製品(1227)で構成される。1228は弥生時代中期の回転台である。

壺には直口壺、広口壺、複合口縁壺、小形壺その他がある。769~811・813~819・821~825・830は直口壺である。直口壺では769~780などが小形の一群である。口縁部の形態は直線的に立ち上がるものや、やや外反するものがある。また口縁部の長さにも長短がある。口縁端部は丸く仕上げた個体が多いが、端面をもつ806~808や、端面に刻目をもつ810、また口縁端部をやや内側に屈曲させた802・821などがある。底部を残すものでは丸底が多数を占める。829・831は短い口縁部、やや強い外反の特徴などから広口壺とした。いずれも平底をもつ。直口壺830では同じく平底を備えている。他に底部を残す壺には827・828・832がある。直口壺の外側調整には、ハケ・ナデなど平滑技法を多用するもの、ミガキA、ミガキBを用いたもの、あるいはその両者を折衷したものなどがある。826・833~846は中形~大形の複合口縁壺である。826は撇入土器と思われ、口縁部が直立する。また体部に外反する頸部が直接取り付く。837~839・844は口縁部外面に数条の波状紋を飾る。847~870・1081は小形~中形の壺で、撇入土器が多いようである。個体数が少なく、類型化は困難である。

甕には庄内式甕、布留式祖形甕、布留式甕、弥生形甕その他がある。庄内式甕には庄内式甕A(871・872)、庄内式甕B(873~879)がある。いずれも体部上半には右上がりの極細タキがみられ、肩部以下



Fig. 118 SD 1108遺物出土状況図(1)

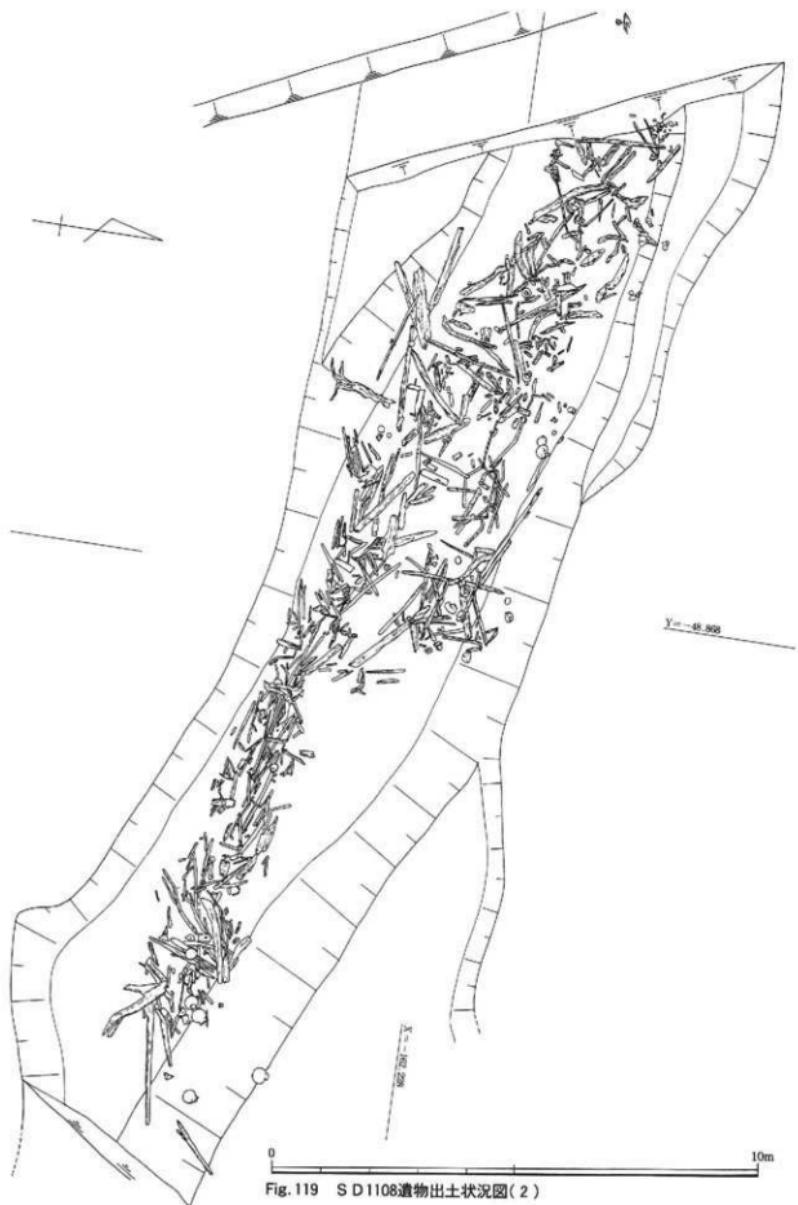


Fig. 119 SD 1108 遺物出土状況図(2)

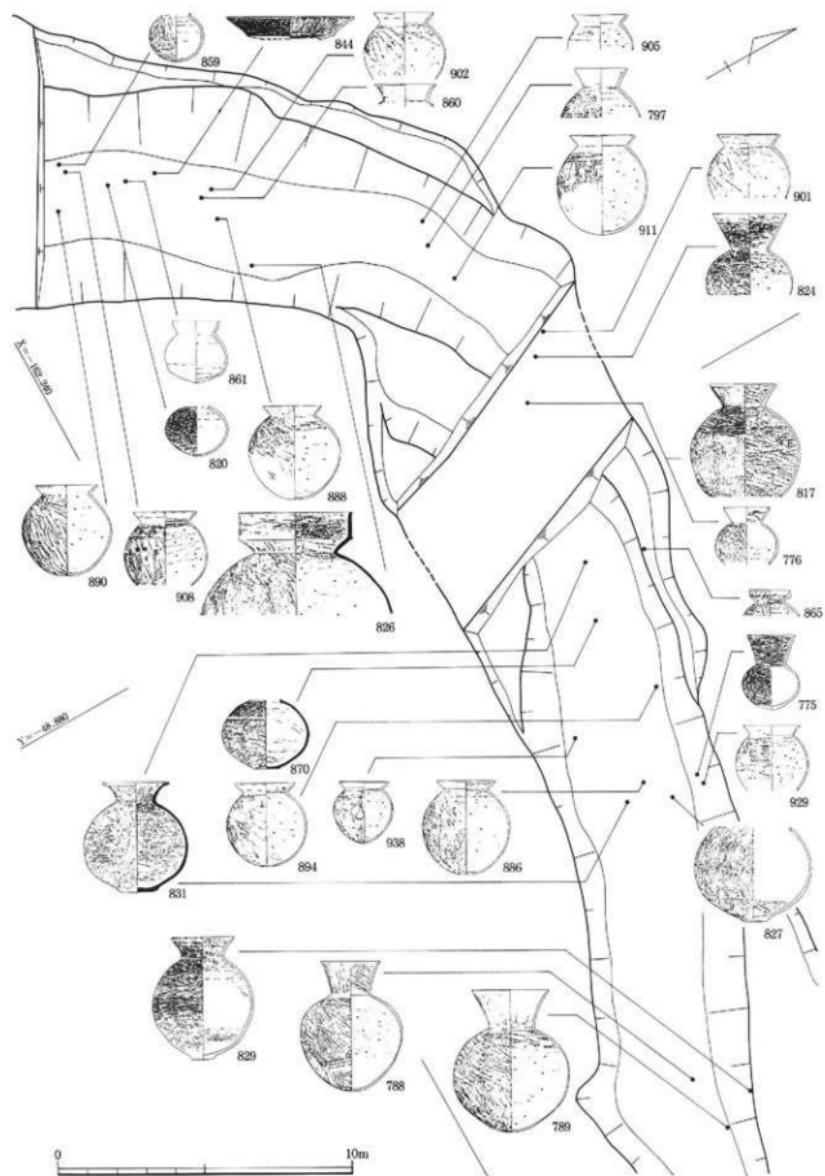


Fig. 120 SD 1108土器平面分布図(1)

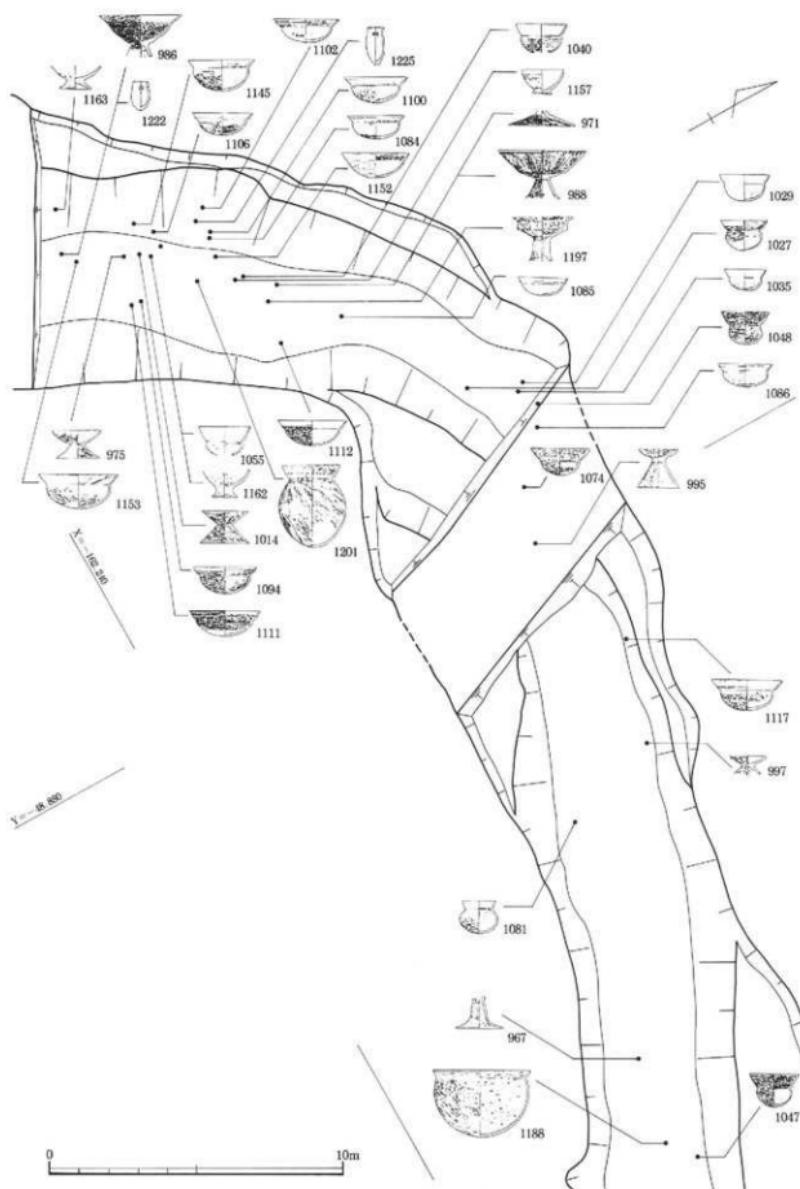


Fig. 121 SD1108土器平面分布図(2)

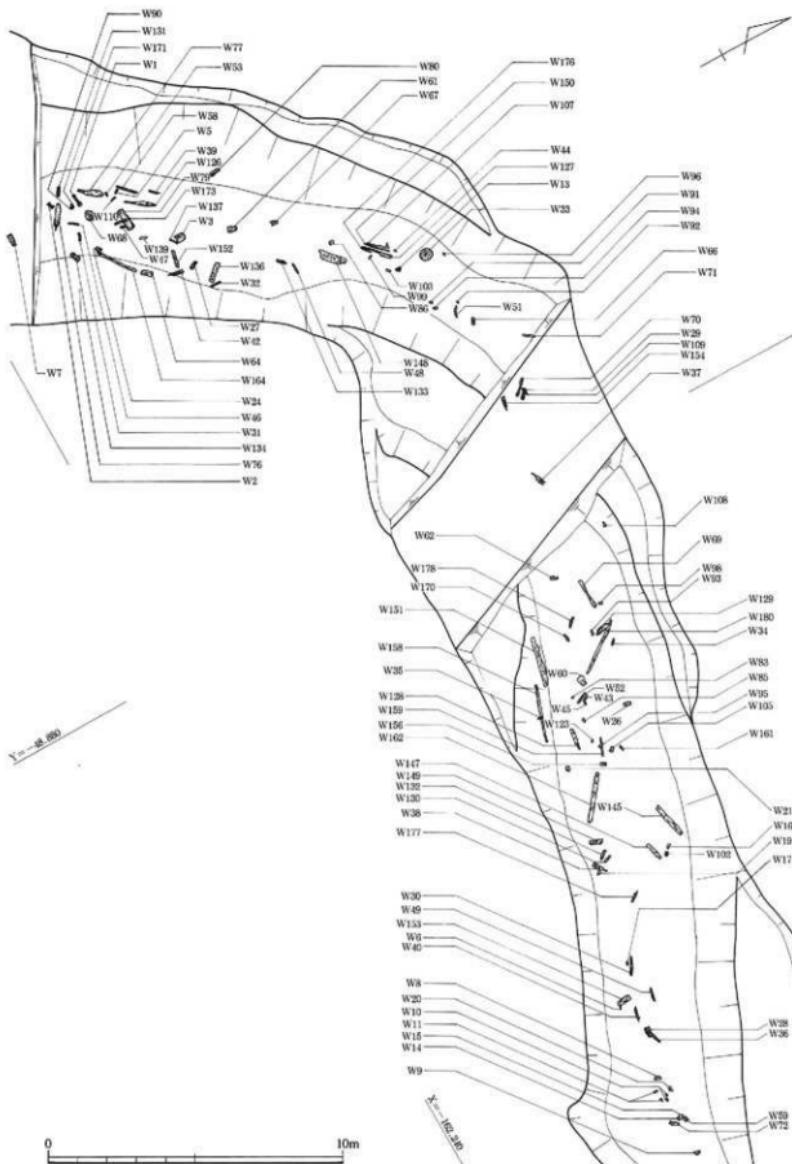


Fig. 122 S D 1108木器平面分布図

をハケ調整する。880～904などは布留式祖形甕である。これらの中には庄内式甕の型式組列の延長として捉え得る可能性をもつものも便宜的に含める。いずれも外面は右下がり斜方向・縦方向のハケ調整が基本で、内面にケズリを加えた個体が圧倒的に多いが、884などケズリを行わない個体も少数ながら存在する。905～918などは布留式甕で、斜・縦方向ハケのち肩部に横方向ハケを1周させ、内面にはいずれもケズリが加えられている。口縁端部はやや上方に拡張したものや、端面をもつものなど多様である。919～933は弥生形甕である。大半は弥生形甕Aであるが、929・930・932・933は内面を削っており、弥生形甕Bに分類される。Aでも形態上は庄内式甕を模した個体もある。934～955は中形以下の布留式祖形甕その他の甕で、類型化の困難な個体も多い。956～958は東海系のS字状口縁台付甕である。

高杯には有稜高杯A・C、布留系高杯、有段高杯、楕形高杯B、低脚などその他の高杯Xがある。959～965は有稜高杯Cで、ミガキBで最終調整されている。966は布留系高杯で平滑技法仕上げである。脚部に透孔をもたない。968は有段高杯で、杯部がミガキBで調整されている。969は有稜高杯Aで、杯部稜線は下方に位置している。他に脚部のみであるが、992・993も有稜高杯Aであろう。970～972は完形品に恵まれないが、楕形高杯Bである。ハケ、ミガキA、ミガキBなど各種の調整がある。973～979・981～985は低脚の高杯で、脚部に透孔をもつ976・977・984と、透孔をもたない973～975・978・979・981～983・985がある。底部を欠く980も低脚高杯に含まれるであろう。調整にはハケ・ナデなど平滑技法の他、ミガキA、ミガキBがある。986～991はその他の高杯で、986～988は撒入土器と思われる。988は杯部外面に黒漆が塗布されている。

器台には小形器台B・C・X、有段器台がある。996～1011は小形器台Bで、口縁端部はやや上方に拡張された個体が目立つ。調整はナデ、ハケ、ミガキA、ミガキBなど各種が認められるが、999はミガキA・Bが共に用いられている。1012～1018は小形器台Cで、いずれも精良な胎土を用いたシャープな作りで、ミガキBで仕上げられている。994・995は小形器台Bを模倣した小形器台Xである。

小形丸底土器は、口縁部の発達に各段階のものが認められる。1019は扁球状の体部に短く立ち上がる口縁部を備えた小形丸底土器である。表面の調整にはナデ、ハケ、ミガキA・ミガキBなど各種が認められ、また胎土も個体によって粗粒の相違がある。1070は最も口縁部が発達した個体で、外面に赤色顔料が塗布されていた形跡がある。1073・1074は撒入土器と思われる。1075～1080はやや扁球状の体部に、立ち上がりの強い内湾する口縁部を備えている。いずれも胎土は精良で、外面調整に密なミガキBを加え、口縁部外面にミガキCを施す個体もある。

有段口縁鉢に分類した1082～1128は、浅い丸底の体部に一旦屈曲する短い口縁部を備える。口縁部の屈曲には個体によって強弱がある。口径は12～18cm前後までの幅がある。表面の最終調整にはハケ、ナデ、ミガキA、ミガキB、ミガキCがあるが、平滑技法とミガキBが折半するようである。1118は体部外面底部付近に鋸歯状のヘラ描きを施している。

鉢には小形鉢A～D、小形鉢H、有孔鉢、中形鉢、大形鉢、超大形鉢、その他がある。1132・1134～1153は小形鉢Cで、完全な丸底の個体が多いが、1149・1152のように退化した平底を有する個体もある。1154～1161は小形鉢Bで、基本的に上げ底状で裾広がりの底部形態Cであるが、1160のように裾広がりで下面が平底を呈した個体もある。1162・1163はBに形態が類似するが、口縁部を欠くので詳細は不明である。1133・1164～1171は小形鉢Aで、平底を残す1164・1165、退化した平底の1166・1167、ほぼ丸底化した1168・1169がある。1172～1177は小形鉢Hで、いずれも平滑技法で調整されている。1178の有孔鉢は極めて粗製である。小形鉢Dには平底の1185、丸底の1179～1182がある。丸底の小形鉢Dは、小